日本ロシア文学会
第 63 回大会資料集

2013 年 11 月 2 日（土）～3 日（日）
東京大学（本郷キャンパス）

日本ロシア文学会

第63回（2013年度）定例総会・研究発表会は，来たる11月2日（土），3日（日）の両日，東京大学（本郷キャンパス）で開催されます。

研究発表会では，12 ブロック 35 件の**個別発表**のほか，2 つの**ワークショップ**が行われます。ふるってご参加ください。

以下，日程をご確認の上，同封のはがきで出欠のご予定を 10 月 12 日（土）までにお知らせいただくようお願いいたします。

11 月 1 日（金）
プレシンポジウム　「〈すべての言葉は翻訳である〉―現代ロシア文学　翻訳の最前線から―」 18:45-20:45　法文 2 号館 2 階 1 番大教室

11 月 2 日（土）					
開会式　09:45-10:00　法文 1 号館 113					
		第 1 会場 法文 1 号館 2 階 212	**第 2 会場** 法文 1 号館 2 階 214	**第 3 会場** 法文 1 号館 1 階 112	**第 4 会場** 法文 1 号館 1 階 113
研究発表	10:05-10:40	A01 ブロック ①	C01 ブロック ⑨		
	10:40-11:15	A02	C02		
	11:15-11:50	A03	C03		
昼食・理事会	11:50-13:00	理事会　法文 1 号館 2 階 215			
研究発表・ワークショップ	13:00-13:35	A04 ブロック ②	C04 ブロック ⑩		
	13:35-14:10	A05	C05		
	14:15-14:50	A06 ブロック ③	C06 ブロック ⑪		ワークショップ W-1 14:00-16:00
	14:50-15:25	A07	C07		
	15:25-16:00	A08	C08		
定例総会	16:10-18:10	法文 2 号館 2 階 1 番大教室			
懇親会	18:30-20:30	山上会館			

11 月 3 日（日）					
		第 1 会場 法文 1 号館 2 階 212	**第 2 会場** 法文 1 号館 2 階 214	**第 3 会場** 法文 1 号館 1 階 112	**第 4 会場** 法文 1 号館 1 階 113
研究発表	09:30-10:05	A09			
	10:05-10:40	A10 ブロック ④		B01 ブロック ⑦	
	10:40-11:15	A11	A13 ブロック ⑤	B02	
	11:15-11:50	A12	A14	B03	
昼食・各種委員会	11:50-13:00	ロシア語教育委員会　2 階 212，国際交流委員会　2 階 214，広報委員会　1 階 112，学会賞選考委員会　1 階 113，編集委員会　2 階 215			
研究発表・ワークショップ	13:00-13:35	A15	C09	B04 ブロック ⑧	
	13:35-14:10	A16 ブロック ⑥	C10 ブロック ⑫	B05	ワークショップ W-2 14:00-15:20
	14:10-14:45	A17	C11		
	14:45-15:20	A18	C12		
シンポジウム	15:30-17:30	法文 2 号館 2 階 1 番大教室			

会場案内

〈受付〉法文 1 号館 1 階 115 前　〈控室〉法文 1 号館 2 階 215　〈書籍等販売〉法文 1 号館 2 階 216，217

プレシンポジウム

〈すべての言葉は翻訳である〉
―現代ロシア文学　翻訳の最前線から―

日時：2013 年 11 月 1 日（金）18 時 45 分－20 時 45 分（開場 18 時 30 分）
場所：　東京大学（本郷キャンパス）法文 2 号館 2 階　1 番大教室
（一般公開，入場無料。予約不要）

【趣旨】

最近，現代ロシア文学の翻訳が盛んになってきている。昨年（2012 年）に限っても，シーシキン，ソローキン，ソコロフ，グロスマン，カヴェーリン，ウリツカヤ等，現代ロシアを代表する作家たちの作品が訳されている。この機を捉えて現代ロシア文学翻訳の現状を紹介し，ロシア文学の多様性を示してさらなる関心を惹起したい。一般向けの啓蒙宣伝イベントとして位置づける。

具体的なプログラムは，以下の 8 名の訳者がパネリストとしてそれぞれ自分の訳した作品と作家についてその魅力を紹介し，朗読を交えて，翻訳で工夫したところやエピソード等を語る。それを受けて，コメンテーターおよびゲストコメンテーターが読者代表としてコメントする。

出版社の担当編集者のコメント，会場からの質問も受ける予定。

パネリスト：

中村唯史（山形大学，ペレーヴィン『恐怖の兜』『寝台特急黄色い矢』）
松下隆志（北海道大学大学院，ソローキン『青い脂』『親衛隊士の日』）
奈倉有里（東京大学大学院，シーシキン『手紙』）
高柳聡子（早稲田大学，トルスタヤ『クィシ』）
上田洋子（早稲田大学他，クルジジャノフスキイ『瞳孔の中』）
毛利公美（一橋大学他，オステル『細菌ペーチカ』『いろいろのはなし』）
坂庭淳史（早稲田大学，タルコフスキー『雪が降るまえに』）
前田和泉（東京外国語大学，ウリツカヤ『通訳ダニエル・シュタイン』）

コメンテーター：　乗松亨平（東京大学）
ゲストコメンテーター：　松永美穂（早稲田大学）
司会・コーディネーター：　沼野恭子（東京外国語大学，ペトルシェフスカヤ『私のいた場所』）

協力：　東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室・現代文芸論研究室
問合せ先：東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室　Tel．03-5841-3847

国際シンポジウム

世界のロシア・アヴァンギャルド研究の断面：起源・発展・展望

Международный симпозиум

«Аспекты изучения русского авангарда: генезис, эволюция и перспективы»

日時：11 月 3 日（日）15 時 30 分－17 時 30 分
場所：東京大学（本郷キャンパス）法文 2 号館 2 階　1 番大教室
企画：日本ロシア文学会国際交流委員会

ロシア・アヴァンギャルドが誕生して 1 世紀が経過した。文学，演劇，映画，美術，建築など，さまざまなジャンルで多面的に展開したこの運動は，1910 - 20 年代のロシア（ソ連）文化を主導するとともに，亡命をも含む人的交流や諸々のメディアを通して，欧米や日本の文化にもインパクトを与えてきた。有形無形のその影響は，20 世紀に留まらず，現代文学・文化にまで及んでいる。

本シンポジウムは，以下の 2 点を目的として企画されたものである。

1）ロシア・アヴァンギャルドの起源と進化を，政治的・社会的な文脈も視野に入れつつ，理論と実証の両面から再考する。
2）ロシア・アヴァンギャルドがめざしたものが，現代文学においていかに展開されているか，また今後どのような深化の可能性が考えられるかを展望する。

この目的を実現するために，国際的に活躍するアヴァンギャルド研究の泰斗であるミハイル・ワイスコフ（ヘブライ大学，著書に«Во весь Логос: Религия Маяковского», «Писатель Сталин»等），エレーナ・トルスタヤ（ヘブライ大学，著書に«МИРПОСЛЕКОНЦА: работы о русской литературе XX века»等），セルゲイ・ビリュコフ（ハーレヴィッテンベルク・マーチン・ルーサー大学，詩人，国際ザーウミ・アカデミー会長，著者に«Муза зауми», «Знак бесконечности: Стихи и композиции»等）の 3 氏に講演していただく。

本シンポジウムでは，ワイスコフ氏にはロシア・アヴァンギャルドの発展における政治的影響や社会的側面を，トルスタヤ氏には理論的側面やジェンダー論との関わりを，ビリュコフ氏には自作詩の朗読を交えながら現代文学におけるアヴァンギャルドの強い影響を，それぞれ斬新な切り口で論じていただく。各講師の論題は以下の通りである。

M.ワイスコフ　「ソ連アヴァンギャルド文学におけるレーニン：形象の起源と発展」
М.Вайскопф: Ленин в литературе советского авангарда: генезис и эволюция образа

E.トルスタヤ　「未来派とフェミニズム：エレーナ・グローとナデージダ・ブロムレイ」
Е. Толстая: Футуризм и феминизм – Елена Гуро и Надежда Бромлей

S.ビリュコフ　「現代アヴァンギャルドのモジュールとベクトル」
С.Бирюков:　Модули и векторы современного авангарда

講演後，ロシア批評理論の専門家ヴァレリー・グレチコ氏と，ロシア詩と 20 世紀の抒情的散文を専門とする奈倉有里氏にコメントを求め，その問題提起を受けて討論に移る。討論には，すべての聴講者が，自由に参加できる。使用言語は，質疑応答も含め，原則としてロシア語とする。司会は 20 世紀ロシア文学を専門とする武田昭文氏が担当する。

プレシンポジウム　11 月 1 日（金）18:45-20:45 法文 2 号館 2 階 1 番大教室

〈すべての言葉は翻訳である〉 ―現代ロシア文学　翻訳の最前線から―	パネリスト：中村唯史，松下隆志，奈倉有里，高柳聡子， 上田洋子，毛利久美，坂庭淳史，前田和泉 コメンテーター：乗松亨平 ゲストコメンテーター：松永美穂　　司会：沼野恭子

第 1 日研究発表・ワークショップ　11 月 2 日（土）法文 1 号館 1 階・2 階

第 1 会場　2 階 212				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック① 11 月 2 日 10:05-11:50	A01	小椋　彩	レーミゾフとチャプスキ：亡命芸術家の交流	西中村浩 貝澤　哉
	A02	東　和穂	言葉のない対話篇―アンドレイ・ベールイ『受洗した中国人』試論―	
	A03	古宮路子	作家の自画像としての主人公像―Ю.К.オレーシャ『羨望』	
ブロック② 11 月 2 日 13:00-14:10	A04	寒河江光徳	ナボコフの作品の脱構築的解釈の試み―『賜物』や『透明な対象』を中心にして	諫早勇一 安岡治子
	A05	中野幸男	シニャフスキーとトラウマ	
ブロック③ 11 月 2 日 14:15-16:00	A06	山下大吾	『エヴゲーニイ・オネーギン』6 章の表現構成に見られるホメーロスの影響について	金沢美知子 坂庭淳史
	A07	山路明日太	『リゴフスカヤ公爵夫人』における視覚芸術の表象と手法	
	A08	飯田梅子	ロシア文学と〈レノーレ譚〉	
第 2 会場　2 階 214				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	
ブロック⑨ 11 月 2 日 10:05-11:50	C01	野中　進	大戦期のヴァシーリー・ローザノフ―思想的正統性と大衆的愛国のあいだで	北見　諭 大須賀史和
	C02	ЖДАНОВ Владимир, 鈴木淳一	Мифотворческие поиски русской национальной идеи	
	C03	ФИЛАТОВ Владимир	М.К. Мамардашвили и современная русская мысль	
ブロック⑩ 11 月 2 日 13:00-14:10	C04	籾内裕子	ツルゲーネフ作『三つの出会い』における音楽と叙情性	伊東一郎 梅津紀雄
	C05	一柳富美子	ロシア音楽研究の新しいパースペクティヴ	
ブロック⑪ 11 月 2 日 14:15-16:00	C06	本田晃子	動く都市／静止する都市―アレクサンドル・メドヴェトキンの『新モスクワ』	浦　雅春 長谷川章
	C07	田中まさき	イヴァン・プイリエフ『クバン・コサック』における戦後コルホーズの形象	
	C08	夏目智徳	メイエルホリドの演出における音楽性―『ブブス先生』（1925 年）を通して―	
第 4 会場　1 階 113				
ブロック・日時	番号	題　目		
ワークショップ 11 月 2 日 14:00-16:00	W-1	〈コロキウム―報告と討論〉 全国 6 言語アンケート調査結果（中間報告）とロシア語教育の方向性 金子百合子，林田理惠，ボンダレンコ・オクサーナ，柳町裕子		

第 2 日研究発表　11 月 3 日（日）法文 1 号館 1 階・2 階

第 1 会場　2 階 R212				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック④ 11 月 3 日 9:30-11:50	A09	関　岳彦	ヨシフ・ブロツキーとヴェネツィア	中村唯史 岩本和久
	A10	笹山　啓	ペレーヴィン『エンパイア V』における「言語」と「神秘」の問題	
	A11	松下　隆志	アイロニーの終焉―ポスト・ソ連ロシアにおけるチェチェン戦争表象	
	A12	ЛАНИН Борис	Классические традиции и новые русские антиутопии 21 века	
ブロック⑥ 11 月 3 日 13:00-15:20	A15	原　真咲	M.A.ブルガーコフの権力観―『白衛軍』の黒いヒーロー「将軍（ヘーチマン），ペトリューラ，ボリシェヴィキ」―	村田真一 大森雅子
	A16	石原公道	M.ブルガーコフ墓所の問題	
	A17	古川　哲	アンドレイ・プラトーノフ『エーテルの道』における「電子」とその哲学的文脈	
	A18	小澤裕之	トゥファノフとハルムス	
第 2 会場　2 階 214				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	
ブロック⑤ 11 月 3 日 10:40-11:50	A13	田中沙季	ドストエフスキー『白痴』におけるムィシュキンの身体の機能	望月哲男 石川達夫
	A14	覚張シルビア	レフ・トルストイの文学作品と教育書籍の内的関係	
ブロック⑫ 11 月 3 日 13:00-15:20	C09	内田健介	日露相扶会と内藤民治の活動	生田美智子 澤田和彦
	C10	松枝佳奈	大庭柯公と雑誌『露西亜評論』―1917 年以後の日本におけるロシア研究のゆくえ―	
	C11	有泉和子	東京裁判　判事・検察・弁護団の攻防	
	C12	坂中紀夫	ロシア探偵小説と日本におけるその紹介と批評	
第 3 会場　1 階 112				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	
ブロック⑦ 11 月 3 日 10:05-11:50	B01	世利彰規	感情的意味を伴った挿入要素の文学テクストにおける機能	三谷惠子 匹田　剛
	B02	ГРЕЧКО Валерий	Л.П. Якубинский и исследование социальных диалектов	
	B03	佐藤規祥	スラヴ諸語におけるワイン製造の用語から見た文化史的考察	
ブロック⑧ 11 月 3 日 13:00-14:10	B04	ШАТОХИНА Ганна	Тест базового уровня по русскому языку для детей (проведение тестирования в Японии и подготовка к нему)	金子百合子 N.ペトリシェヴァ
	B05	ТОМИТА Маргарита	Творчество в обучении русскому языку японских студентов	
第 4 会場　1 階 113				
ブロック・日時	番号	題　目		
ワークショップ 11 月 3 日 14:00-15:20	W-2	ワークショップ―2015 年 ICCEES 幕張大会参加に向けて 生田美智子，木村崇，鴻野わか菜，越野剛，野中進，乗松亨平，望月哲男		

シンポジウム　11 月 3 日（日）15:30-17:30 法文 2 号館 2 階 1 番大教室

世界のロシア・アヴァンギャルド研究の断面： 起源・発展・展望 日本ロシア文学会主催・上智大学共催	司会：武田昭文 コメンテーター：V. グレチコ，奈倉有里 報告者：M. Вайскопф, Е. Толстая, С. Бирюков

会場校からのお知らせ

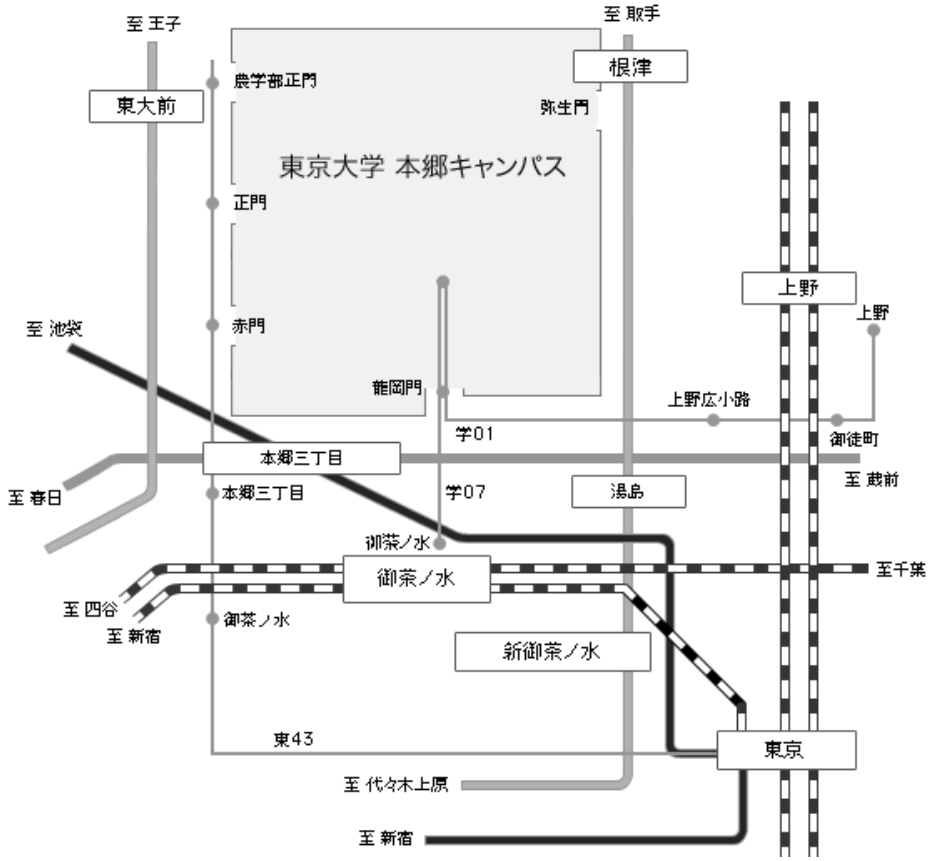
【宿泊・昼食その他】

・宿泊施設の斡旋はいたしておりません。お手数ですが，各自で会場近辺の宿泊施設をご手配ください。
・昼食の手配はいたしません。土日とも，学内の中央食堂が営業しております（11:00～14:00）。会場周辺にも多数の飲食店がございますのでご利用ください。
・お車でのご来場はご遠慮ください。

【大会実行委員会へのお問い合わせ】

東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
電話 03-5841-3847　E-mail: slav@l.u-tokyo.ac.jp

【アクセス・マップ】



【会場校までの交通機関等】

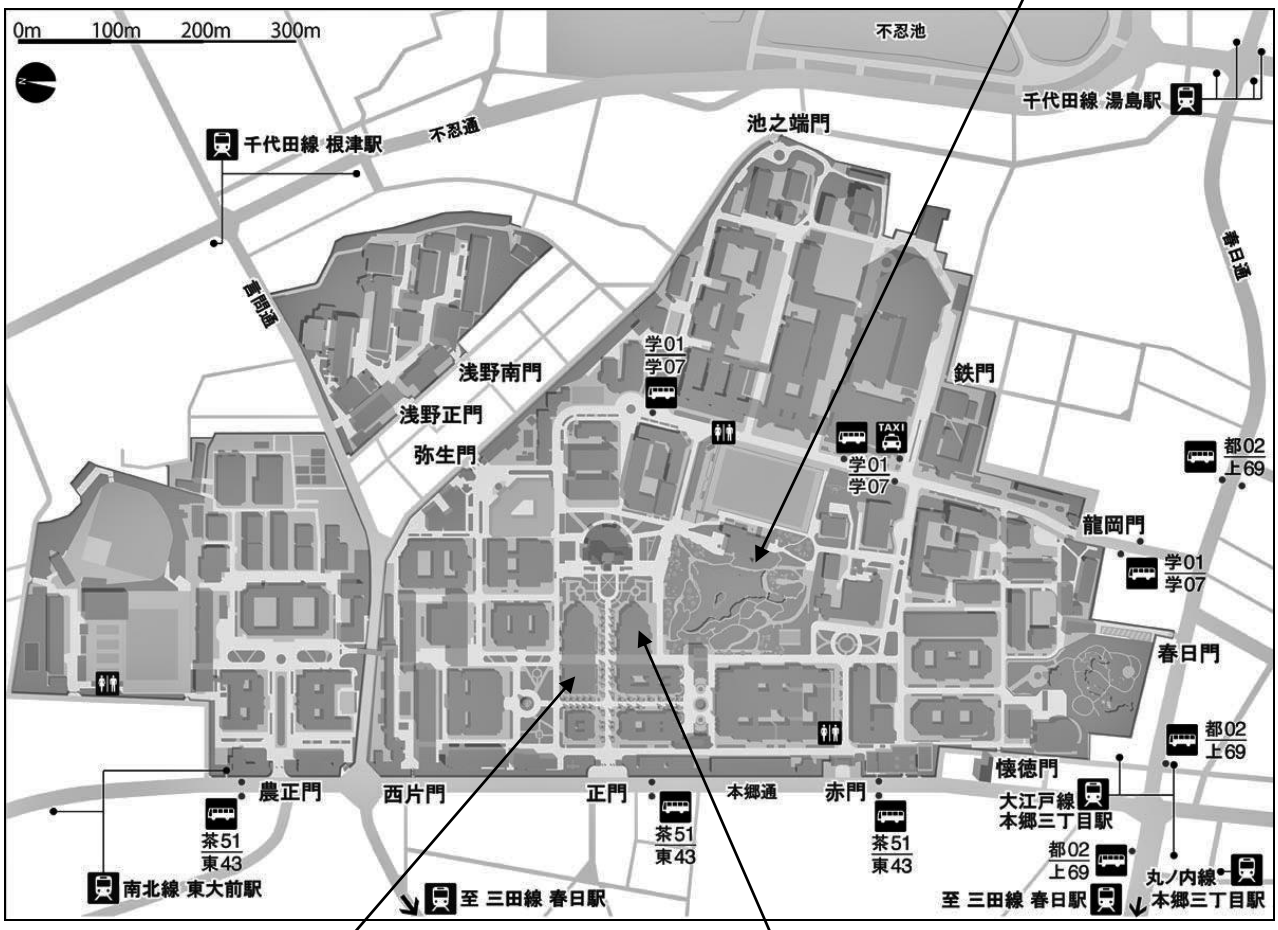
最寄り駅	所要時間
本郷三丁目駅（東京メトロ丸の内線）	徒歩 8 分
本郷三丁目駅（都営地下鉄大江戸線）	徒歩 6 分
湯島駅又は根津駅（東京メトロ千代田線）	徒歩 8 分
東大前駅（東京メトロ南北線）	徒歩 6 分
春日駅（都営地下鉄三田線）	徒歩 10 分

◆ JR 各駅からのアクセス

東京駅	地下鉄利用	丸の内線(池袋行) → 本郷三丁目駅下車
御茶ノ水駅 (JR 中央線，総武線)	地下鉄利用	丸の内線(池袋行) → 本郷三丁目駅下車
	地下鉄利用	千代田線(取手方面行) → 湯島駅又は根津駅下車
	都バス利用	[茶 51]駒込駅南口又は[東 43]荒川土手操車所前行 →東大（赤門前，正門前，農学部前バス停）下車
	学バス利用	[学 07]東大構内行 → 東大(龍岡門，病院前，構内バス停)下車
御徒町駅(JR 山手線等)	都バス利用	[都 02]大塚駅前又は[上 69]小滝橋車庫前行 → 本郷三丁目駅下車
		[都 02]大塚駅前又は[上 69]小滝橋車庫前行 → 湯島四丁目下車
上野駅(JR 山手線等)	学バス利用	[学 01]東大構内行→東大（龍岡門，病院前，構内バス停)下車

【キャンパスマップ】

懇親会場：山上会館 1 階　談話ホール

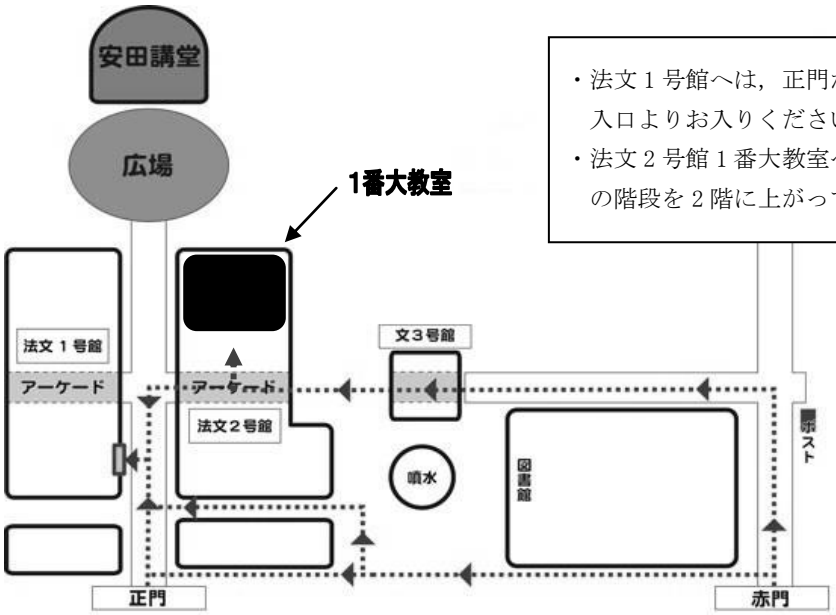


発表会場：法文 1 号館 1・2 階

総会・シンポジウム会場：法文 2 号館 2 階　1 番大教室

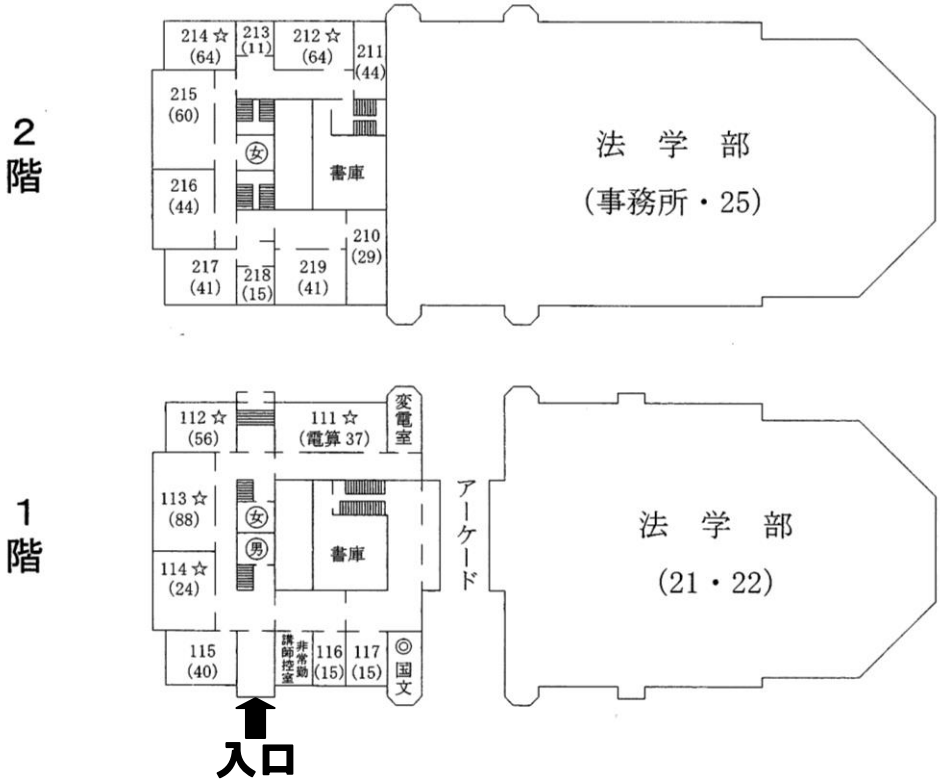
＊当日は，春日門は通行止めとなる予定です。

【法文 1，2 号館への案内図】



・法文 1 号館へは，正門から安田講堂方面に続く銀杏並木沿いの入口よりお入りください。
・法文 2 号館 1 番大教室へは，アーケードから建物内に入り，奥の階段を 2 階に上がってください。

【法文 1 号館教室配置】



〈受付〉
1 階 115 前

〈控室〉
2 階 215

〈書籍等販売〉
2 階 216，217

〈発表会場〉
1 階 112，113，
2 階 212，214

懇親会のご案内

日時：11 月 2 日（土）18 時 30 分-20 時 30 分
場所：山上会館 1 階　談話ホール（8 頁の地図をご参照ください）
会費：常勤職にある会員 7,000 円
常勤職にない会員（有給の任期職にある方や年金受給者を除く）4,000 円
大学院生 3,000 円

日本ロシア文学会第 63 回研究発表会
報告要旨（予稿）集

A01　小椋　彩　レーミゾフとチャプスキ：亡命芸術家の交流
A02　東　和穂　言葉のない対話篇―アンドレイ・ベールイ『受洗した中国人』試論―
A03　古宮路子　作家の自画像としての主人公像―Ю.K.オレーシャ『羨望』
A04　寒河江光徳　ナボコフの作品の脱構築的解釈の試み―『賜物』や『透明な対象』を中心にして
A05　中野幸男　シニャフスキーとトラウマ
A06　山下大吾　『エヴゲーニイ・オネーギン』6 章の表現構成に見られるホメーロスの影響について
A07　山路明日太　『リゴフスカヤ公爵夫人』における視覚芸術の表象と手法
A08　飯田梅子　ロシア文学と〈レノーレ譚〉
A09　関　岳彦　ヨシフ・ブロツキーとヴェネツィア
A10　笹山　啓　ペレーヴィン『エンパイア V』における「言語」と「神秘」の問題
A11　松下隆志　アイロニーの終焉―ポストソ連ロシアにおけるチェチェン戦争表象
A12　ラーニン・ボリス　Классические традиции и новые русские антиутопии 21 века
A13　田中沙季　ドストエフスキー『白痴』におけるムィシュキンの身体の機能
A14　覚張シルビア　レフ・トルストイの文学作品と教育書籍の内的関係
A15　原　真咲　M.A.ブルガーコフの権力観―『白衛軍』の黒いヒーロー「将軍（ヘーチマン），ペトリューラ，ボリシェヴィキ」―
A16　石原公道　M.ブルガーコフ墓所の問題
A17　古川　哲　アンドレイ・プラトーノフ『エーテルの道』における「電子」とその哲学的文脈
A18　小澤裕之　トゥファノフとハルムス
B01　世利彰規　感情的意味を伴った挿入要素の文学テクストにおける機能
B02　グレチコ・ヴァレリー　L.P.ヤクビンスキーと社会方言研究
B03　佐藤規祥　スラヴ諸語におけるワイン製造の用語から見た文化史的考察
B04　シャトヒナ・ガンナ　Тест базового уровня по русскому языку для детей (проведение тестирования в Японии и подготовка к нему)
B05　冨田マルガリータ　Творчество в обучении русскому языку японских студентов
C01　野中　進　大戦期のヴァシーリー・ローザノフ―思想的正統性と大衆的愛国のあいだで
C02　ジダーノフ・ヴラヂーミル，鈴木淳一　Мифотворческие поиски русской национальной идеи
C03　フィラトフ・ヴラジーミル　М.К. Мамардашвили и современная русская мысль
C04　籾内裕子　ツルゲーネフ作『三つの出会い』における音楽と叙情性
C05　一柳富美子　ロシア音楽研究の新しいパースペクティヴ
C06　本田晃子　動く都市／静止する都市―アレクサンドル・メドヴェトキンの『新モスクワ』
C07　田中まさき　イヴァン・プイリエフ『クバン・コサック』における戦後コルホーズの形象
C08　夏目智徳　メイエルホリドの演出における音楽性―『ブブス先生』(1925 年)を通して―
C09　内田健介　日露相扶会と内藤民治の活動
C10　松枝佳奈　大庭柯公と雑誌『露西亜評論』―1917 年以後の日本におけるロシア研究のゆくえ―
C11　有泉和子　東京裁判　判事・検察・弁護団の攻防
C12　坂中紀夫　ロシア探偵小説と日本におけるその紹介と批評
W-1　ワークショップ　〈コロキウム―報告と討論〉全国 6 言語アンケート調査結果（中間報告）とロシア語学習者の傾向
（林田理惠，金子百合子，ボンダレンコ・オクサーナ，柳町裕子）
W-2　ワークショップ　2015 年 ICCEES 幕張大会参加に向けて
（生田美智子，木村崇，鴻野わか菜，越野剛，野中進，乗松亨平，望月哲男）

日本ロシア文学会

2013 年 9 月

Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 63th Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

A01	Hikaru OGURA	A.M. Remizov and J. Czapski: the Cultural Exchange between Russian and Polish émigré Artists in Paris
A02	Кадзухо ХИГАСИ	Диалог без слов – Опыт толкования «Крещеного китайца» Андрея Белого –
A03	Митико КОМИЯ	Образ главного героя как автопортрет писателя – «Зависть» Ю.К. Олеша
A04	Мицунори САГАЭ	Попытка прочтения произведений Владимира Набокова ("Дара" и "Прозрачных вещей" и т.д.) с точки зрения деконструктивизма
A05	Юкио НАКАНО	Синявский и травма
A06	Даиго ЯМАСИТА	О влиянии Гомера на структуру выражений в шестой главе «Евгения Онегина»
A07	Асута ЯМАДЗИ	Образы и приемы изобразительного искусства в романе М.Ю. Лермонтова «Княгиня Лиговская»
A08	Умэко ИИДА	Мотив «возвращения мертвого жениха» в русской литературе
A09	Takehiko SEKI	Joseph Brodsky and Venice
A10	Хироси САСАЯМА	«Вопрос о языке и мистике в романе Пелевина «Ампир V»
A11	Takashi MATSUSHITA	The End of Irony: Representations of the Chechen Wars in Post-Soviet Russia
A12	Борис ЛАНИН	Классические традиции и новые русские антиутопии 21 века
A13	Саки ТАНАКА	Функция тела Мышкина в романе Ф.М. Достоевского «Идиот»
A14	Сильвия КАКУБАРИ	Внутренняя связь художественных и педагогических произведений Л. Толстого
A15	Масаки ХАРА	Взгляд М.А. Булгакова на власть: черные герои в романе «Белая гвардия» – Гетьман, Петлюра, Большевики
A16	Кимимити ИСИХАРА	Вопрос о месте захоронения М.А. Булгакова
A17	Akira FURUKAWA	On the “electron” in Andrei Platonov’s "*Efirnyi trakt”* and its philosophical context
A18	Хироюки ОДЗАВА	Туфанов и Хармс
B01	Акинори СЭРИ	Функции вводных элементов с эмоциональным значением в литературном тексте
B02	Валерий ГРЕЧКО	Л.П. Якубинский и исследование социальных диалектов
B03	Нориёси САТО	Культурно-историческое исследование на основании терминов виноделия в славянских языках
B04	Ганна ШАТОХИНА	Тест базового уровня по русскому языку для детей (проведение тестирования в Японии и подготовка к нему)
B05	Маргарита ТОМИТА	Творчество в обучении русскому языку японских студентов
C01	Susumu NONAKA	Vasily Rozanov in the Years of the Great War: the Legacy of Thought and Mass Patriotism
C02	Владимир ЖДАНОВ, Дзюнъити СУДЗУКИ	Мифотворческие поиски русской национальной идеи
C03	Владимир ФИЛАТОВ	М.К. Мамардашвили и современная русская мысль
C04	Юко МОМИУТИ	Музыка и лиризм в рассказе Тургенева «Три встречи»
C05	Fumiko HITOTSUYANAGI	New perspective on Russian music research
C06	Акико ХОНДА	Движущийся город и неподвижный город: «Новая Москва» Александра Медведкина
C07	Масаки ТАНАКА	Образ послевоенных колхозов в фильме И. Пырьева «Кубанские казаки»
C08	Chisato NATSUME	Meyerhold’s musicality in the production *Teacher Bubus*
C09	Кэнсукэ УТИДА	Деятельность Общества «Русско-японская взаимопомощь» и Тамидзи Наито
C10	Кана МАЦУЭДА	Оба Како в ежемесячном журнале «Русском обозрение»: Направление японского исследования России после 1917 года
C11	Кадзуко АРИИДЗУМИ	Международный военный трибунал для Дальнего Востока – Тактика судей, прокуроров и защиты –
C12	Норио САКАНАКА	Русская детективная литература и ее введения и критики в Японии
W-1	Workshop	Коллоквиум: доклады «Промежуточные результаты анкетирования учащихся японских вузов по 6 иностранным языкам: ориентиры для обучения русскому языку», обсуждение (Риэ ХАЯСИДА, Юрико КАНЭКО, Оксана БОНДАРЕНКО, Юко ЯНАГИМАТИ)

W-2 Workshop	Workshop for the ICCEES Congress 2015 in Makuhari: Information and Tips for Participation (Micihko IKUTA, Takashi KIMURA, Wakana KONO, Go KOSHINO, Susumu NONAKA, Kyohei NORIMATSU, Tetsuo MOCHIZUKI)

JASRLL
September 2013

以下に掲載の研究報告要旨の本文は著者によって
提出されたものをそのまま印刷しています。

【A01】レーミゾフとチャプスキ：亡命芸術家の交流

小椋　彩

アレクセイ・レーミゾフの亡命生活を物心ともに支えたナタリヤ・レズニコワの回想には，以下のように記されている。「コドリャンスカヤ〔訳者注：レーミゾフ回想記作者〕の本に引用された A.M.〔レーミゾフ〕の手紙の多くは，あきらかに，彼の生活のもっとも陰鬱な情景を描き出すために書きぬかれたものだ。たとえば，パリには A.M.がじぶんの作品を読み聞かせられる人がいなかった，というような。ところがこれは真実ではない。当時パリには A.M.の友人がたくさん住んでいた。つまり作家や，芸術面で彼に近い友人が」。レズニコワがここで名指した作家や芸術家のなかに，ポーランド人作家・画家のユゼフ・チャプスキ（1896-1993）がまじっている。第 2 次大戦後にパリに永住することになるチャプスキは，失明しつつあった晩年のレーミゾフをその住居にしばしば訪れ，ふたりは親交を温めた。ところが，互いの芸術のよき理解者として，またともに「書き」，「描く」者として，強い印象を与えあったものの，両者の実際の影響関係について，いまだ詳細は明らかにされていない。本報告では，レーミゾフとチャプスキの書簡や回想，パリの亡命ポーランドの雑誌「クリトゥラ」に掲載されたチャプスキの筆による記事等を中心に資料を読み解き，亡命芸術家たちの影響関係を解明する端緒とする。

ところで，革命前のペテルブルグに学び，ロシア語に堪能だったチャプスキは，すでに 1910 年代より多くのロシア文化人と交際しつつ，ロシア文化への理解を深めていった。したがって本報告でレーミゾフとチャプスキの周辺を探ることが，レーミゾフひとりについてのみならず，パリの亡命ロシア文化への新しい視座の獲得につながると期待される。

（おぐら　ひかる，東京大学）

【A02】言葉のない対話篇―アンドレイ・ベールイ『受洗した中国人』試論―

東　和穂

ベールイが 1921 年に発表した『受洗した中国人』は，前作『コーチク・レターエフ』の後日譚に当たり，そのためこの二つは一まとめにして論じられることも多い。だがこの作品は前作と，登場人物，彼らを取り巻く状況という点では共通しているものの，手法や主題といった点では明らかに別のものを追及している。本発表の課題は，ベールイの創作史に於いて，この作品が持っている個別的意義を明らかにすることである。

この作品の文体には三つの際立った特徴があるが，その第一は俗語・方言，さらにそこから作られた造語の多用である。その源泉の一つとなっているのはダーリの辞典だが，ベールイは社会言語学的文脈とは全く無関係に，謂わば言葉遊びとして，様々な俗語・方言をテクスト上に氾濫させている。第二の特徴は，テクストに於いて，様々な三歩脚の韻律が執拗に反復されることである。その結果，多くの単語が韻律的要請から恣意的に変形され，一種の造語となるに至る。第三の文体的特徴は，登場人物の描写に際して，その身振り・表情が言葉よりも強調されることである。こうした描写によって現れるのは，グロテスクな身体であり，そこでは言葉でさえも，身体的特徴の一つであるかのように用いられている。

このような文体的特徴は，何れも言葉とその言葉が対象としているものとの間にある齟齬を露呈させずにはおかない。これこそベールイが意図していたことで，彼は日常言語を変形させることによって，その後ろに隠されたもう一つのテクストを暗示しているのだ。この隠されたテクストが目指すものは，時間の克服であり，さらには語り手，主人公のコーチクとその父との対話である。これまでの多くの研究者は，主人公を巡る父母の対立について言及してきたが，それはテクストの表層で起こることに過ぎず，実際には彼は常に父へと引きつけられており，小説の後半以降は専らこの父の導きによって，新しい時間の認識へと進んでいく。

この小説が自伝的要素を色濃く持っており，特に父の描写に於いてそれが顕著である，ということを考慮するなら，父との隠された対話は特別な意味を帯びるだろう。ベールイは時間の克服という自らの形而上学的課題を，父ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ブガーエフの「単子論」と結びつけることで，現実には起こらなかったであろう父との哲学的対話を，小説という時空間の中で実現しようとしたのかもしれない。

（ひがし　かずほ，東京大学院生）

【A03】作家の自画像としての主人公像—Ю.K.オレーシャ『羨望』

古宮　路子

Ю.K.オレーシャ（1899－1960）の小説『羨望』(1927)は，主人公カヴァレーロフを巡る物語であるが，この登場人物が作者の自伝性を帯びていることは，これまで様々な形で指摘されてきた。第一回ソヴィエト作家大会演説（1934）では，オレーシャ自身がそれを示唆している。また，わが国の研究においては岩本和久が「分身」というキーワードでこの問題に取り組んでいる。

本発表は,『羨望』の主人公像の自伝性という問題を，ロシア国立文学芸術資料館所収の手書き原稿を手掛かりに，より深く掘り下げる。そしてそれに基づき，カヴァレーロフを巡る物語の背後にある，オレーシャを巡る物語とはいかなるものかを明らかにすることを目的とする。『羨望』の手書き原稿は，決定稿では明示されていないカヴァレーロフの素性を明らかにしているが，これはオレーシャの伝記的事実と驚くほど類似している。作家になることを夢見てハリコフからモスクワへやってきた主人公の過去は，作者の過去そのものである。

しかし，オレーシャはカヴァレーロフに，自身とは決定的に異なる側面を付与した。オレーシャが新聞の仕事の傍ら『羨望』の執筆を続け，同作で文壇デビューを果たしたのに対し，手書き原稿でのカヴァレーロフは作家になる夢を語るばかりで遂に創作に着手することがない。この人物像は，社会に居場所を見いだせないまま破滅してゆく決定稿にも反映している。この意味で，カヴァレーロフは完全な自伝的登場人物とは言えない。

オレーシャとその主人公の差異が何に起因するのかを考えるに当たって，本発表はメタフィクションという考え方を導入する。『羨望』はフィクションについてのフィクション，つまり，物語が丸ごと比喩として機能し作者の文学に対する考え方を表現している物語なのである。

この考え方に即すと，カヴァレーロフ像は，伝記的事実のみならず，創作上の苦悩や芸術観が重ね合わせられて実現した，作家の自画像であることがわかる。なりそこないの作家という主人公像は，それに付せられた「羨望」,「老い」,「肥満」,「堕落」といった兆候を介して，オレーシャ自身の危機意識を表している。それは，渾身の一作であるはずの『羨望』が同時代の「社会的要請」に応答していないという危機感なのである。

（こみや　みちこ，東京大学院生）

【A04】ナボコフの作品の脱構築的解釈の試み—『賜物』や『透明な対象』を中心にして

寒河江　光徳

ウラジーミル・ナボコフの作品にはシニフィアンとシニフィエ，ロゴスとパトス，散文と韻文，隠喩と換喩など，構造主義で認められる典型的な二項対立の図式を意識的に倒錯し，顛倒させる試みや，作者的な「私」と主人公としての「彼」を意図的に混同し，ナラトロジー的戦略に基づき読者を眩迷へと誘うなどの様々なトリックが組み込まれている。

本報告ではナボコフのロシア語と英語で書かれた諸作品を比べながら，作品に見受けられる諸要素をポール・ド・マンの『読むことのアレゴリー』等の著作に例示される脱構築的解釈の方法によって読み解くことを目的にする。言うまでもなくナボコフはロシア・フォルマリストやロシア・モダニズムの詩人たちと同時代的潮流に浴しながらも，ケンブリッジ，ベルリン，パリ，アメリカへと移住・亡命するなかで，それぞれの国で発達した批評理論の時代的傾向性を十分に取り入れながら創作活動に従事していった。ただ，それは時代の文芸批評の動向に敏感であったというだけにはとどまらない。実践批評，構造主義，受容理論，精神分析批評，新批評などそれぞれの国で発達した批評理論の趨勢を理解し咀嚼し，大学の文学講義においては，先進的な批評のスタイルを積極的に取り入れるのみならず，自身の創作においても脱構築的な読解を先取りした試みを行っていた可能性がある。そのような問題意識に立脚し，ナボコフの作品を読んでいった際に何が理解できるか。本報告では，ロシア語で書かれた作品として代表作の『賜物』やロシア語で書かれたいくつかの詩を取り上げ,英語で書かれた『ロリータ』,『透明な対象』と比べながら，英語で書かれた作品に見受けられる傾向性と同様のものがロシア語の作品にも見受けられるものなのか。その点を検証しながらも，ポール・ド・マン的な脱構築的批評を使いながら，これまで指摘されてこなかった作品の新しい解釈を導きだせるよう努めたい。

（さがえ　みつのり，創価大学）

【A05】シニャフスキーとトラウマ

中野　幸男

本報告は博士論文の第二章「収容所とトラウマ（1966-1973）」を書き改めたものであり，作家・批評家アンドレイ・シニャフスキーの創作における記憶と表象の問題を扱った博士論文のうち，主に収容所文学のトラウマの問題とシニャフスキーの文学作品および絵画論に関して述べた部分を追加補足したものである。シニャフスキーやソルジェニーツィン，シャラーモフやオクジャワなどにより書かれた収容所の内と外,受刑者と帰還者,そして彼らを迎える家族を対象とした収容所文学は「統計と数字に顔と名前を与える」（レオーナ・トーカー）ものとして，現代ロシア文学史の中に位置している。トラウマと文学作品との関わりにおいてキャシー・カルースの研究やロシア文学ではアレクサンドル・エトキントによる研究が知られている。こういったロシア文学とトラウマに関する現代の研究の概観を述べながら，20 世紀ロシア文学の特殊な現象であった収容所文学を考察する。アン・アプルボームによれば「異論派」の大部分はジャコバン派に由来するとされる「人民の敵」の息子や娘たちであり，シニャフスキーもその一人であった。釈放後に息子と恐怖について語る父に関する話は『おやすみなさい』第三章などに描かれている。エトキントのシニャフスキー論でも触れられているが，シニャフスキーが収容所内でプーシキン論『プーシキンとの散歩』を書いたように，ソルジェニーツィンもグリボエードフ論である『我に返って』を収容所内で執筆していた。双方ともに，これまでのソヴィエト批評と大きく異なる「読み」を含んだ収容所批評の可能性を示していた。イタリアの現代思想家ジョルジュ・アガンベンの概念「ホモ・サケル」，つまり合法的に法の外に存在する共同体から締め出された「剥き出しの生」をロシアの収容所言説に結びつけたとき，エトキントの語るように，シャラーモフや収容所の画家ボリス・スヴェシニコフがロシアの「ホモ・サケル」として現れていた。美術史家ゴロムシトクから紹介を受け，個人的にも親しかったシニャフスキーにより書かれたスヴェシニコフ論『白い叙事詩』では書かれなかった空白を収容所体験と結び付けられていた。シニャフスキー本人の収容所文学である『合唱からの声』,『おやすみなさい』や書簡集『127 通の愛に関する手紙』を参照しながら，ロシア文学におけるトラウマの問題を考察する。

（なかの　ゆきお，東京大学）

【A06】『エヴゲーニイ・オネーギン』6章の表現構成に見られるホメーロスの影響について

山下　大吾

『エヴゲーニイ・オネーギン』（以下 EO）の一分冊としてまとめて刊行された 4 章及び 5 章には，プーシキンの生前に刊行された 2 種の単行本版では削除されている 5 章の 37 連と 38 連が収められている。その主な内容は，EO とホメーロスの『イーリアス』とを対比させながら，直前の 36 連で取り上げられた宴に関する話題や,ホメーロスに登場する「けがらわしい」ヘレネーに対しプーシキンの描くターニャの有する優位性，また直後の 6 章で描かれることになる，オネーギンとレンスキイとの決闘の予告となっている。本発表ではこれらを手掛かりとして，ホメーロスの『イーリアス』及び『オデュッセイア』に見られる表現や構成を参照しつつ, EO 6 章での決闘の場面における描写に見られるいわゆる本歌取りの可能性や，EO におけるホメーロスとは対照的な詩的特徴などを検討する。

EO 6 章の 24 連から 25 連では, オネーギンの決闘当日の朝の様子が描かれている。介添人ザレツキイと共に早々と決闘の準備を終えたレンスキイに対し，彼は未だに深い眠りに落ちたままで，寝過ごしに気付いた後慌てて支度を整える仕儀となる。この場面では本来明けの明星であるはずの金星が「宵の明星」と呼ばれており，また使用人ギヨーのオネーギンに差し出す衣類の順番は通常期待すべきものとは逆になっている。これらは決闘に臨むオネーギンとレンスキイとの意識の差を効果的に暗示するものと捉えられるであろうが，同時にホメーロスの両作品に見られる特有の表現を踏まえたものである可能性が高い。

その他レンスキイ絶命時に見られる比喩の特徴，6 章 35 連でのレンスキイの遺体を指す страшный клад「恐ろしい宝」の意味や，その遺体を運ぶ馬や馬車を仕立てるザレツキイの描写などに関しても,ホメーロスの特に『イーリアス』に見られる表現や構成を考慮に入れると，その詩的価値が新たに浮かび上がるものと考えられる。

また上述の 5 章の 37 連と 38 連が単行本版で削除された理由についても，これまでに提案されている複数の解釈を踏まえながら, 38 連で用いられている決闘を予告する表現を基にして新たな考察を試みたい。

（やました　だいご，京都大学）

【A07】『リゴフスカヤ公爵夫人』における視覚芸術の表象と手法

山路　明日太

作家レールモントフはわかくして絵をえがき，特別に絵画を学んでもいる。そんなかれの素養は，詩や散文の抒情性にみちた情景描写にも表れているように感じられる。実際,『現代の英雄』の風景描写はときに作家の画才との関連で論じられてもいる。ところで発表者の考えでは，レールモントフは自己の散文作品のスタイルを構築していくうえで,『リゴフスカヤ公爵夫人』において視覚芸術的な表象を取り込んでいるようにみえる。もっともわかりやすいのは肖像画の例であろう。

この作品において肖像画は小説プロットのなかで重要な役割をはたしている。そのさい注目すべきは，肖像画にたいする語り手や登場人物たちの視線と，肖像画のなかからの主人公たちへの視線である。この作品では肖像画は主人公たちによって鑑賞され論じられる対象であるばかりではない。肖像画のなかからの視点を導入することによって，多角的に主人公たちを描きだす機能をもはたしている。だが，この作品における視覚芸術的な表象はプロット上の絵画の導入にとどまらない。物語手法にまで視覚芸術の反映がみられるのだ。

『リゴフスカヤ公爵夫人』のひとつの特徴として，登場人物たちの視線のありかたを挙げることができる。かれらの直接眼で受けとったイメージが読者にそのまま伝えられている。ときには，主人公の眼差しの先にある目標人物もその視線を邪魔する障害物も，目にしたままのモノとして描きだされる。そのためこれらの描写では換喩表現が効果的にもちいられている。そこには，主人公の眼に映る対象を物体そのものとして描きとろうとした作者の創作姿勢がみられる。そのことは視覚芸術的な表象をとおして散文作品を構築しようとした手法のあらわれだと考えられる。

おなじく，まるで読者に場面状況を絵として想像させるためででもあるかのように，場面転換にさいして語り手が独特のかたちで物語に介入している。そこでは一つ一つの場面がもっとも印象的な状態でストップさせられて，つぎのシーンへとひき継がれていく。それは個々の場面があたかも絵画のように静的に固定され，読者の目に焼きつけられていくような印象をあたえる。そんな語り手の場面転換には，物語手法の構築に苦心する作者の創作姿勢が感じられよう。

発表では，上記のような『リゴフスカヤ公爵夫人』における視覚芸術の表象と手法について，当時の視覚芸術の歴史的背景とも比較検討しながら考察したい。

（やまじ　あすた，中京大学）

【A08】ロシア文学と〈レノーレ譚〉

飯田　梅子

〈レノーレ譚〉は，死者が愛する者を墓場から迎えに来るという民間伝承のモチーフをもとにしたもので，ドイツの詩人ビュルガー（1747-1794）のバラッド詩『レノーレ』（1774）により文学の位置にまで高められた。『レノーレ』以後，このような筋を持つ物語を〈レノーレ譚〉と呼ぶようになり，ロマン派時代のヨーロッパで大流行を見ることになる。

ロシアでも，ジュコーフスキイのバラッド詩『リュドミーラ』(1808),『スヴェトラーナ』(1813),『レノーラ』（1831），カテーニンのバラッド詩『オリガ』(1816）などが『レノーレ』の翻訳・翻案詩として生み出された。ジュコーフスキイの『リュドミーラ』は，その新奇さにより読者のあいだに大反響を呼び起こし，ロシアにバラッド詩を根づかせた記念碑的作品となった。前作よりさらに自由度の高い翻案詩となった『スヴェトラーナ』は，スヴャートキの占いなど，ロシアに広く伝わるフォークロア的モチーフを豊富に採りいれ，読者の心の奥底に訴えかけるものとなり，詩人の代名詞ともなった。

ロシア文学における〈レノーレ譚〉の伝統は，〈吸血鬼譚〉などと結びつきながら，詩や散文のジャンルをこえて，プーシキン，レールモントフ，ゴーゴリ，A.K.トルストイ，トゥルゲーネフなどに継承され，多くの作品に結実したと考えられる。しかし，これらの作品の多くは，従来，大詩人や大作家の気紛れ，あるいは戯れとして等閑視されがちであった。

ジュコーフスキイはなぜ三度も『レノーレ』を翻案したのか。プーシキンはなぜ再三に渡り『スヴェトラーナ』を引用したのか。ゴーゴリやA.K.トルストイの作品において度々吸血鬼が描かれるのはなぜか。なぜトゥルゲーネフは，幻想小説群において生ける死者を描いたのか。

本発表では，ロシアにおける『レノーレ』受容，〈レノーレ譚〉的作品の系譜を概観する。そのうえで，果たしてこれらの（恐らくは恐怖小説，ゴシック小説に連なる）伝統は途絶える運命にあったのか，途絶えてしまったのか，それとも形を変えて脈々と受け継がれているのか，などについて考察したい。その過程で，上記の疑問の答えを得ることも目指したい。

（いいだ　うめこ，札幌大学）

【A09】ヨシフ・ブロツキーとヴェネツィア

関　岳彦

亡命後，毎年のようにヴェネツィアを訪れていたヨシフ・ブロツキーは，この街を描いた作品をいくつも残している。亡命直後の詩『潟』(1973 年)，英語で書かれた散文作品『ウォーターマーク』(1992 年) など，死の直前まで続いたブロツキーのヴェネツィアに関連する創作は，ヴェネツィア・テクストと呼ぶべき一種の集合体を形成しているのである。

ブロツキーとヴェネツィアという問題は，比較的早くから研究者たちの関心の対象となり，ブロツキーがヴェネツィアを故郷のレニングラードに重ね合わせたこと，それが 19 世紀から続くロシアのヴェネツィア観と結びつくものであることなどが指摘されている。しかしながら従来の研究では,『ウォーターマーク』に注目したものが目立つ一方で，詩作品（特にこの街に関する二つ目のテクストである 1977 年の『サン・ピエトロ』以降の作品）は充分に検討されていないように思われる。ブロツキーの創作は，帰国の望みを捨ててアメリカ人としての人生を選択し，異国の異なる言語環境で生きるという亡命生活の中で，様々な影響を受けて変化，発展していると考えられるため，亡命時代を通じて描かれてきたヴェネツィアのテーマもまた，一つの散文作品にのみ注目するのではなく，亡命直後から最晩年までのテクスト全体を考慮に入れる必要がある。

本発表では，主にブロツキー最初のヴェネツィア・テクストである『潟』とそれに続く詩『サン・ピエトロ』を分析し，ブロツキーとヴェネツィアという問題を検討したい。亡命後初めての冬を描いた『潟』はクリスマスの詩として扱われることも多いが，亡命直後のブロツキーが初めてヴェネツィアを訪れた時に書かれたものだという点で重要である。一方『サン・ピエトロ』は，レフ・ロセフがヴェネツィア・テクストを列挙して論じた際にも言及されていないなど，これまでに注目されることが少なかった作品だが，ヴェネツィアの鏡のような性質を打ち消すかのような霧の形象が登場し，街の中でも観光地化されていない地域が主に描かれているという興味深い特徴を持つ。これらのテクストの分析を通して，亡命後間もない時期のブロツキーがヴェネツィアという都市をどう捉えていたか，ブロツキーの創作においてヴェネツィアとヴェネツィア・テクストはどのような意味を持っていたかを考察する。

（せき　たけひこ，東京大学院生）

【A10】ペレーヴィン『エンパイア V』 における「言語」と「神秘」の問題

笹山　啓

本発表の狙いはロシアの現代作家ヴィクトル・ペレーヴィンの 2006 年の長編『エンパイア V』において展開される「言語」と「神秘」にまつわる思想を分析することにある。本作は吸血鬼となった主人公が人間を統治するための術を学ぶ過程が物語の骨組みとなっている。そこで重要視されるものの 1 つが「言説（ディスクール)」と呼ばれる技法で，言葉は世界を映しだす鏡であり，その仕組みを利用することによって人間を操ることができるという趣旨のもとで主人公の教育は行われる。そうして言語と世界の直接的な結びつきを示唆しながら，一方で作者は言語のいわば外部に存在する真理を体得するために主人公たちが麻薬を使用する姿を描き,「言語」と「世界」,「言語」と「神秘」の関係についての考察を深めていく。そもそもペレーヴィンが創作の初期段階からチベット密教や禅，老荘思想などの東洋思想や人類学者カルロス・カスタネダの著作などに影響が考えられる神秘主義的傾向を持っていたことは広く知られている。神秘主義の要諦は言語を理性的に使用することによっては把握しえない高次の存在を措定する点にあり，それに到達するために瞑想修行や麻薬の使用などの言語を媒介としない手段によって得られる神秘体験が重要視される。作家のそうした神秘主義的思想の 1 つの達成が 1996 年の『チャパーエフと空虚』で，ここでは「神秘家」チャパーエフによる主人公の救済というテーマが描かれた。しかし寓話的な物語空間から資本主義社会ロシアへと舞台を移した 90 年代終わりから 2000 年代始めの作品群においてペレーヴィンは，いかなる神秘体験も消費社会のシステムから脱却する手助けとなりえないまま現実に縛りつけられる人々の姿を描き，通俗的な神秘主義への傾倒の度合いを低くしている。そうした中 2004 年の『妖怪の聖典』では『チャパーエフと空虚』と同一の仏教的モチーフが再び持ち出され，東洋思想の哲学的側面と神秘主義的側面の関係が問い直された。続く 2006 年の『エンパイア V』で作者は,『妖怪の聖典』でいくらか言及するにとどまり深くは掘り下げなかった「言語」というテーマを作品の中心に据えたり，麻薬を使用しての神秘体験に対するあからさまな懐疑を主人公に抱かせるなどしており，これらの特徴から本作はペレーヴィンの言語観や神秘主義思想に対する態度の変遷を辿るための興味深い材料となっている。

（ささやま　ひろし，東京外国語大学院生）

【A11】アイロニーの終焉—ポストソ連ロシアにおけるチェチェン戦争表象

松下　隆志

ロシア・ポストモダニズム論の提唱者の一人であるV.クーリツィンは，ポストモダニズムの「後（ポスト）」を論じた論文(1997)で，1990年代にロシアを席巻したポストモダニズムは「その時代の英雄的段階」を終えたと主張し，その根拠の一つとして「アイロニーの終焉」を挙げた。本報告の目的は，1990～2000年代のポストソ連ロシアにおいて大きな政治問題でありつづけてきたチェチェン戦争を扱った文学作品や映画作品を取り上げ，それらの作品におけるチェチェン表象の変遷のなかに，クーリツィンが主張した「アイロニーの終焉」を読み取ることである。

乗松亨平が『リアリズムの条件』(2009)で指摘しているところに拠れば，ロシア文学におけるカフカス表象は，プーシキンやレールモントフ，トルストイらのカフカス物の作品に見られるように，テクストが表象するものと「現実」との乖離に基づくアイロニーの意識に貫かれてきた。こうした表象と「現実」との乖離という問題は，ポストソ連ロシアにおけるカフカス表象においても依然として存在しており，とりわけ「表象の戦争」とも呼ばれるチェチェン戦争の場合，「現実の」戦争を描くことはますます困難な課題となっている。

本報告ではまず，ポストソ連ロシアのチェチェン戦争作品におけるアイロニーの意識を概観するために，プーシキンやトルストイの古典作品『カフカスの虜』を，アイロニカルな改変を加えた上で現代のチェチェン戦争の文脈に置き換えたS.ボドロフ監督の映画(1994)とV.マカーニンの短編小説(1996)，及びそれに対する「現実」の側からの批判，そして，メディアのなかの戦争を描いたA.バラバーノフ監督の映画『戦争』(2002)を取り上げる。

次に，このようなアイロニーの意識に基づいた一連の作品に対し，クーリツィンのいう「アイロニーの終焉」を示す作品として，2000年代のロシア文学シーンを代表するリアリズム作家Z.プリレーピンの長編『病理』(2004)を取り上げる。本作は実際に前線で兵士として戦った作者の体験に基づいた半自伝的な作品であり，文壇からは従来のチェチェン戦争小説とは一線を画すものとして高く評価された。本報告では，上で取り上げた諸作品に比べ本作品のテクストにはチェチェン表象が極端に希薄である点に着目し，「再記述」の有効性への信頼に立脚したポストモダニズム的アイロニーが機能しなくなっていることを指摘する。

（まつした　たかし，北海道大学院生）

【A12】Классические традиции и новые русские антиутопии 21 века

ЛАНИН Борис

Цель доклада – проанализировать новые русские литературные антиутопии в свете классических традиций жанра.

Новизна доклада состоит в том, что впервые в свете классических традиций антиутопического жанра будут проанализированы произведения современных авторов В. Сорокина («День опричника» и «Метель»), В. Пелевина («S.N.U.F.F.»), В. Бенигсена («ГенАцид», «Раяд», «ВИТЧ»), И. Лагутенко и В. Авченко («Владивосток 3000»), А. Терехова («Немцы»).

Как известно, антиутопия – это литературный жанр, опровергающий утопический проект, изложенный внутри произведения. Если в утопии обещается счастье для всех, то антиутопия пытается «проверить» обещание на судьбе конкретного человека. Трагическая судьба главных героев антиутопии становится сюжетом произведения. Антиутопия непременно должна быть занимательной, чтобы стать удачной. Её разоблачительный заряд не должен наскучить читателю негативными эмоциями, которые он вызывает. Чтобы стать «удачным» в массовой культуре, антиутопический текст должен быть занимательным. В теоретическом плане антиутопия реанимирует «занимательность разъяснения», появившуюся уже после романтизма. Такими «занимательными» были реалистические произведения, которым предписывалось разъяснять события и явления, а не привлекать к ним внимание. Так проявлялся позитивизм, когда новые факты требовали констатации и разъяснения.

Для антиутопического произведения – книги ли, фильма ли – вовсе не обязательно показывать всё общество в разрезе. Достаточно показать фрагмент, осколок, которые станут аллегорией целого. Изоморфизм в антиутопии проявляется гораздо чаще и нагляднее, чем во многих других жанрах. Какую социальную информацию и прогноз несут современные антиутопии, как эти внешние элементы влияют поэтику жанра – ответы на эти вопросы мы ставим своей исследовательской задачей.

（ラーニン　ボリス，ИСМО РАО）

【A13】ドストエフスキー『白痴』におけるムィシュキンの身体の機能

田中　沙季

Ф.M.ドストエフスキーの長篇小説『白痴』(1868 年)における主人公ムィシュキンの接吻や「撫でる」行為は，「対象の内部に侵入せず，周縁にとどまる」という彼の発話の一部とも共通する機能を持っており，その機能は後の『カラマーゾフの兄弟』(1879-1880 年)におけるアリョーシャの行為や言葉に継承されている。

これまではムィシュキン論というと，発話の内容を分析した上で「作者のように他者の内面を物語る」力の存在を指摘するものが多く，身体的行為と「物語る」力の関連性については看過されがちであった。だがこのキャラクターをより包括的に捉えるためには，他者の内面を「物語る」行為と同等に，他者の身体に接触する行為へ注意を向ける必要がある。

ムィシュキンの接吻や「撫でる」行為は，他者の主体性を脅かすことなく表面に触れることで他者の内面に働きかける方法であり，その点ではまるで生きた肉体を持っていないかのように行われ，他者が自己を定義する機会を剥奪する「内面を物語る」行為とは対照的と言える。ムィシュキンの身体的行為にみられる「他者の内的自由の保存」という機能は彼が発する言葉の中にも断片的に認められ，「内面に踏み込み物語る」アプローチと並ぶ，「外面にとどまる」アプローチとして体系化することが可能である。外面へのアプローチは，内面へのアプローチが登場人物の反発にあいその限界が明らかになっていくのに合わせて次第に前景化し，終局のムィシュキンとロゴージンの邂逅の場面で最も鮮明にあらわれている。『白痴』のムィシュキンにおいて観察された「他者の内面に踏み込まない」アプローチは『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャに引き継がれている。『白痴』での身体的接触は写真に対してや狂気に陥った者に対してなど，会話が成り立たない時になされているのがほとんどであるのに対して，アリョーシャのイヴァンへの接吻は，イヴァンの問いかけおよび彼の「大審問官伝説」への応答として機能している。『カラマーゾフの兄弟』において身体的接触は他者の意識に対する働きかけの強度を増しており，他者の主体性の保証と精神的困難からの救済の両立という「外面に触れる」アプローチの目的が『白痴』よりも高いレベルで達成されていると言える。

（たなか　さき，早稲田大学院生）

【A14】レフ・トルストイの文学作品と教育書籍の内的関係

覚張　シルビア

レフ・トルストイは，卓越した作家であったと同時に，地主・教育者・宗教思想家・社会活動家としての多様な側面を備えていた。トルストイにおいて，これらの諸側面は有機的に結びついているが，その中でも特に，その関係が着目されつつも十分な研究がなされていないのが，この作家における文学と教育の関係である。トルストイが地主になったのは，環境が用意してくれたということもあるが，大学を退学した後，それが直近の生きる道となったからである。また，1869 年に「アルザマスの危機」を端緒として始まった精神的危機の結果，トルストイは不可避的に宗教思想的著作に着手することになった。宗教思想家・社会活動家としてのトルストイは，生の問題を解決しようとする過程における必然的帰結として誕生したのである。その中で，偶然や借金返済の必要性に迫られたという理由もあるとはいえ，トルストイが自発的に行き着いたのが作家と教育者としての道であった。

彼は，ヤースナヤ・ポリャーナで学校を開き，農民の子供達の教育に携わるが，官憲の妨害に遭い，中断を余儀なくされる。その後，教育によって成し遂げようとしたことを，文学の世界で実現しようとするかの如くに『戦争と平和』に着手する。一方，『アンナ・カレーニナ』の執筆時には，早くこの作品を書き終え，『ノーヴァヤ・アーズブカ』に専念したいと望んでいた。文学を始めた契機は，教育に比べればより現実的で，動機も異なるが，文学と教育は，トルストイの人生において相互補完的な役割を担っていると考えられるのである。しかしながら，文学と教育活動を研究する共通基盤の欠如ゆえに，これらの関係を捉える十分な研究がなされているとは言い難い。

トルストイが『アーズブカ』の執筆に着手したのは「アルザマスの危機」を体験した後であり，その意味では，『アンナ・カレーニナ』に反映される精神的危機をすでに孕んでいたはずである。本論では，「アルザマスの危機」が描かれている『狂人日記』を分析の足場とすることで，トルストイの文学作品と『ノーヴァヤ・アーズブカ』，ロシア語読本の関係をテクスト分析によって明らかにしていく。それによって，例えば，不和から調和へと移行する過程において現れる均等化（уравнение）のプロセス，善のモチーフに特有の「動き（движение）」の概念など，文学作品と教育書籍に共通する新たな思想的・構造的な特徴を見出すことが可能となる。

（かくばり　しるびあ，上智大学）

【A15】M.A.ブルガーコフの権力観—『白衛軍』の黒いヒーロー「将軍（ヘーチマン），ペトリューラ，ボリシェヴィキ」—

原　真咲

ウクライナ出身の作家ブルガーコフ最初の長編『白衛軍』(1922-24) は，革命と内戦の故郷を舞台にした幻想的時代小説である。物語は，1917 年の革命から 1919 年 1 月に赤軍がキエフを占領するまでの一連の事件を背景に展開する。山場となる市街戦は，1918 年 12 月 14 日に起きたウクライナ・ナショナリスト左派勢力（執政政府）によるウクライナ・ナショナリスト右派政権（ウクライナ国）の転覆を描いたものである。題名の「白衛軍」は所謂ロシアの白軍のことではなくて，ウクライナ国政府の下に首都防衛のため組織された義勇従士団を指している。

従来，本作に対する研究は登場人物のモデル探しや歴史的背景との比較対照に集中してきた。その反面，作品そのものの構造分析，作家によって挿入された様々なモチーフが持たされているイメージ，そして登場人物がいかに脚色されているかについての研究は十分になされてはこなかった。今回は，物語進展の原動力となっている黒い群衆と革命を指揮する権力者たちの姿を通じて，作家の権力に対する姿勢を探っていく。

本作に登場する政治的権力者としては，第一に「白衛軍」の仕えたウクライナ国元首である将軍（ヘーチマン）が挙げられる。この君主を，作家は祭日の「偽王」として描く。彼が将軍（ヘーチマン）に選出されるのは，サーカス場の黒山の人だかりの喧騒の中である。その治世のあいだ「まち」は祝祭の場と化し，最後には将軍（ヘーチマン）本人が仮装して舞台から遁走，つまり外国人に変装して亡命してしまう。その姿はウクライナの人形芝居ヴェルテープの操り人形を思わせる（実際，彼は敵対者からは「傀儡（マリオネット）」と呼ばれている)。その治世は，いわば人形芝居の幕間劇なのである。彼に代わって現れる次の「偽王」は，執政政府軍の総大将ペトリューラである。黒い農民蜂起軍を背に白馬に跨るその姿は，黙示録に現れる「勝利の上の勝利」を求める白馬の騎手を思わせる。ナポレオンに擬えられる彼はまさに「地上の権力者」の象徴である。ロシアから来るボリシェヴィキは,「反キリストの王国」モスクワからウクライナを侵略する悪魔の軍勢として描かれる。作家はまた，彼らをほかの二人の「偽王」と同列に置くことにより，その権威を相対化する。共産党支配もまた,「偽王」による仮初の支配なのである。

地上のあらゆる権力に対する批判という，終生貫かれる作家の姿勢がこの最初の作品でもすでに明瞭に現れているのである。

（はら　まさき，東京外国語大学院生）

【A16】M.ブルガーコフ墓所の問題

石原　公道

モスクワはノヴォデヴィチ修道院，付属墓地，スタニスラフスキー，チェーホフ等多数のモスクワ芸術座関係者が眠る一郭，妻と共に名前，生没年の記された，かつてはゴーゴリの墓として使われてもいたという墓石のブルガーコフ墓所。故地キエフの，1907 年同年齢同病で亡くなった，石碑に肖像写真が描かれている，荒れるに任されたバイコフ墓地の父親のそれとは対照的に，この墓所には常に来訪者が絶えない。これは現在モスクワでのブルガーコフの人気の高さをも物語り，モスクワ芸術座では，シーズンに一度はブルガーコフ原作の戯曲が上演されるが，そして大方のロシア人がノヴォデヴィチにある墓所に何の違和感も持つことがないという状況にあるのだが，これは実は奇妙なことなのだ。実際亡くなった 1940 年当時，彼はモスクワ芸術座を 4 年前に離れ，ボリショイ劇場の台本作者，特別顧問という身分だったのだから。多くの研究者たちもこれを問題とすることなく現在に至っている。このようなブルガーコフの墓所の問題に必要な考察を加えて，同時に伝記戯曲「アレクサンドル・プーシキン」の上演始末を探ってみたい。

1935 年ヴァフタンゴフ劇場の依頼で，プーシキン没後百周年を前に，敬愛する作家ヴェレサーエフと共著で戯曲「アレクサンドル・プーシキン」執筆。しかしダンテスの形象を巡っての対立から共著解消，単独の作品となるも，報酬は折半し，二人の交情はブルガーコフの死まで続く。36 年モスクワ芸術座での戯曲「モリエール」(「カバラ・スヴァトシ」改題）7 回の公演後撤回となる事件と関わり，ヴァフタンゴフでの「プーシキン」も同様。しかしこの戯曲を高く評価したネミロヴィチ=ダンチェンコにより，彼の秘書，ブルガーコフ未亡人となるエレーナの姉の計らいもあり，モスクワ芸術座と「プーシキン」上演契約が，全著作の権限委譲されたエレーナと結ばれた。40 年のブルガーコフ死後，大祖国戦争の時期とも重なり，数度の契約更新，全原稿を携えてのタシケント疎開時の題名変更「最後の日々」を経て，ネ=ダの強い指導で初演されたのは 43 年だった。その直後ネ=ダは死亡,以後ブルガーコフ復活の 60 年代までこの戯曲は命脈を保った。

こうしてエレーナとネ=ダとのつながりを第一としてブルガーコフの墓所がモスクワ芸術座関係者の敷地に建てられるわけだが，戯曲改題も含めて，このことをブルガーコフが望んだとは思えないということの問題提起をしてみたい。

（いしはら　きみみち，関東支部）

【A17】アンドレイ・プラトーノフ『エーテルの道』における「電子」とその哲学的文脈

古川　哲

アンドレイ・プラトーノフ（1899-1951）の小説には，ニコライ・フョードロフ（1829-1903）の哲学的思索がとりわけ大きな影響を与えていることが知られている。そして，プラトーノフがフョードロフを批判的に受容したこともまた，プラトーノフ研究においてフョードロフからの影響が議論される際に，つとに指摘されてきた。本発表は，このような研究動向を踏まえつつ，SF 的な中編『エーテルの道』（1927 年完成）における物質の概念を論じる。本作品については，これまで，作品中に登場する，三世代にわたる物理学者たちの感情や人生に主に注目して議論が行われてきた。しかし，この作品における物理学の理論に焦点をあわせて議論した研究は稀である。この点に本発表の新しさがある。

『エーテルの道』において物質は「電子」という一種類の粒子で構成されるとされている。これは，今日の物理学における物質に対する理解とは異なるばかりではなく，作品が書かれた当時の物理学の見解とも異なる，架空の理論である。注目すべきことは，作品において「電子」が，生物であり，繁殖活動をするとされていること，そして，「電子」の栄養補給は，「電子」の死骸（この作品ではそれが「エーテル」と呼ばれている）によってまかなわれていることである。つまり，生物である「電子」は先行する世代を食べて生きているのだ。

こうした「電子」の性格は，フョードロフの理論と相いれないと考えられる。なぜなら，フョードロフの思想のなかで重要な要素の一つとして，父祖への尊敬があるからだ。そしてフョードロフにおける父祖への尊敬は，彼の思想における他の要素，つまり死者の復活や，それにともなう人口増加に対処するための宇宙開発，そして純潔に対して彼が与える高い価値などと，すべて関連している。そのため，「電子」は，フョードロフの哲学に対する体系的な批判をはらんでいるといっても過言ではない。

このように，本発表では『エーテルの道』における「電子」の位置づけや属性を，フョードロフの思想と対立するものとして捉え，検討する。さらに，「電子」という極めて微小な対象についての理論が，どのようにこの小説のストーリーと結びつき，そのなかにどのように位置付けられているかを検討する。そうすることで，「電子」という対象に対してプラトーノフが取っている態度，ひいては彼の世界観に迫ることができるからである。

（ふるかわ　あきら，東京外国語大学）

【A18】トゥファノフとハルムス

小澤　裕之

報告の狙いは，なぜハルムスがトゥファノフから離反したのかを明らかにすることである。1925 年にハルムスはトゥファノフの設立した「ザーウミ派結社 DSO」に所属し，その後もしばらく文学活動を共にするが，しかしやがて両者の距離は開いてゆく。

彼らの隔たりと共にハルムスの詩学が変遷して行ったことは既に明らかにされており，またその隔たりの原因にも定説がある。ザーウミ観の相違によって，二人は反目しあうようになったと言うのである。すなわち，トゥファノフがザーウミに多言語的な国際性を付与していたのに対して，ハルムスは国粋性（ナショナリティ）を要求していたと言われている。しかしながら，これは事実に即していない。第一にトゥファノフのザーウミは次第にスラヴ民族の国粋性を獲得し始めるからであり，第二にハルムスにおけるザーウミの国粋性がいかなるものなのかが明確でないからである。

ではなぜハルムスはトゥファノフのグループを脱退したのか。今回の報告では，二つの理由を提示したい。一つ目は，グループ内における人間関係である。トゥファノフは年少のメンバーたちに対していかにも師匠然としてヒエラルキーの頂点に君臨し，個人の創作的自由を制御していた。これに反発したヴヴェジェンスキーらに同調する形で，ハルムスはトゥファノフの元を去ったのではないだろうか。

もう一つの理由は，両者の詩学上の差異である。ザーウミ観の対立ではなく，方法論の差異が原因であった可能性が考えられる。トゥファノフにしろハルムスにしろ，詩の表現すべき対象は世界の「本質」であって，通常の言葉使いではそれを為すことは不可能だと考えていた。そこでトゥファノフは抽象的ザーウミを用いてこれを為そうとし，一方ハルムスは意味論的ザーウミを用いてこれを為そうとした。抽象的ザーウミとは通常の辞書にはない言葉であり，意味論的ザーウミとは通常の辞書的配置を超越した語用である。

興味深いのは，トゥファノフのザーウミはやがてロシア・アヴァンギャルドと運命を共にして挫折するのに対して，ハルムスのザーウミは不条理や無意味といった別の文学的伝統に接続されることである。トゥファノフの歩む軌跡はロシア・アヴァンギャルドの終焉への，ハルムスの歩む軌跡はその復活（あるいは変質）への道程なのである。

（おざわ　ひろゆき，東京大学院生）

【B01】感情的意味を伴った挿入要素の文学テクストにおける機能

世利　彰規

本発表では主観的モダリティを表わす挿入語句・挿入文の中でも感情や情動に関わる意味を表わすものをあつかう。前回までの発表は，発話内容が引用されたものかどうかを表わす挿入要素を対象に，イントネーションに着目した分析を試みてきた。今回は，感情・評価といったモダリティの意味を表わす挿入語を対象に，それらが文学テクストにおいて果たす役割について考えていく。現段階では，前回のように音声に着目することは考えていない。

本発表の目的は，ロシア語の中の感情や評価の表現の様々な特徴（どのような意味をもった語彙がそれを構成しているのか，どこにそれらが置かれるのか）から，文学における文体分析に応用できる新たな視点や手法を見つけ出すことである。文学テクストの地の文における作者や語り手が作中の出来事や人物についてどのような感情や意見を抱いているのか解釈する際に役立つと考えられる。したがって，語学研究の中でも文学寄りの立場をとる。

これまでの研究と比較した新規性については以下の点が考えられる。モダリティ研究に関して，動詞によって表わされる客観的モダリティの分類や，様相論理学による論理式の応用が行われてきた。その一方で，感情や情緒とモダリティや挿入語とが関連づけられることはまれであった。本発表において感情に関わる意味を表わす挿入語について取り扱う。

文法書において，感情に関わる挿入要素は，主観性や評価,発話者の気分と結びつけて論じられることが多い。意味についてそれらは，喜び，同意，肯定的評価や，哀れみ，不承認，否定的評価，驚き，困惑，確実性の観点からの発話内容の評価，などに分類される。

現段階では次のような発表の内容を考えている。まず感情や評価の意味とモダリティとの関係を概観する。次に，問題とする感情の意味を伴う挿入要素を定義する。挙げる例文をとるのも特定の文学テクストとし，地の文の語り手の意見を表わす挿入要素が，登場人物や出来事など語られる内容および物語の進展との関係や，それらにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしようと試みる。具体的にまだはっきりとしていないが，計算機を使った統計的な技法を利用して分析結果を処理し，より多くの客観性をもたせようと考えている。

（せり　あきのり，東京大学院生）

【B02】Л.П. Якубинский и исследование социальных диалектов

ГРЕЧКО Валерий

Выдающийся лингвист Лев Петрович Якубинский до сих пор остается недостаточно исследованной фигурой. Более известный как активный участник первых сборников ОПОЯЗа в 1910-е гг., сформулировавший само понятие «поэтический язык», которое стало «визитной карточкой» русского формализма, или как один из пионеров изучения функциональных разновидностей языка (в частности, диалогической речи) в 1920-е, Якубинский в 1930-е гг. обращается к вопросам языковой политики и социальной дифференциации языка, становясь одним из основателей советской социолингвистики.

Наш доклад посвящен, пожалуй, наименее исследованной стороне наследия Якубинского – его работам по социальной диалектологии, которой он активно занимался в начале 1930-х годов. Одним из центральных тезисов его социолингвистической концепции стало положение о дифференциации языка в соответствии с социальной структурой общества, ведущей к образованию классовых диалектов. Основные идеи этой концепции были сформулированы Якубинским (в соавторстве с А.М. Ивановым) в серии статей, опубликованных в журнале «Литературная учеба» в 1930–1931 гг. (в 1932 году эти статьи были перепечатаны отдельным сборником «Очерки по языку»). В своих статьях Якубинский рассматривает язык как гетерогенное образование, состоящее из языков отдельных классовых групп (язык крестьянства, язык пролетариата и т.д.), а также обращается к вопросу о формировании единого национального языка.

В представленном докладе анализируются истоки и составные части социолингвистической концепции Якубинского, а также рассматривается вопрос о том, насколько его поворот к этой теме был обусловлен специфическими обстоятельствами эпохи. Также прослеживается место концепции Якубинского в контексте ожесточенной лингвистико-политической дискуссии того времени.

（グレチコ　ヴァレリー，東京大学）

【B03】スラヴ諸語におけるワイン製造の用語から見た文化史的考察

佐藤 規祥

ロシア語をはじめスラヴ諸語には「ワイン」を意味する語が伝わっていることから，スヴ諸族が分裂，拡散するはるか以前から，原スラヴ人がワインについての知識を持っていたのは疑いない。しかしながら，これについては語源学的観点からも文化史的観点からも根本的な疑問点が残されている。というのは，その語が古代ローマ期以後のラテン語からの借用語である可能性が排除できないからである。これは вино や виноград という限られた語の語源だけで推測することで陥りがちな危うい議論ともいえる。

他方，もしスラヴ諸語とラテン語のいずれの語もより古い年代における共通の起源に発したものだと仮定するなら，そのことを論証する根拠が要請される。そればかりか，そのためにはワインを作るのに必要不可欠なブドウの栽培を行える環境に原スラヴ人がかつて居住していたことが前提とならざるを得ない。このため，これらの難題を一度に解明する議論はむしろ避けられる傾向があった。

今発表においては，ワインを製造，貯蔵するうえで製樽技術と醸造文化が不可欠であることに着眼し，その文化的様相を反映する用語を特定し，それらの語源解釈に基づく推論を提示した。そこで，ブドウの収穫後，搾汁，醸造過程で用いる「編みかご」や「樽」およびその各部「栓」「ほぞ」，さらに製樽工具「両手かんな」「槌」などを意味する語彙十数例につき語源を調べた。すると，これらの語彙にはスラヴ諸語との同源語が一貫してラテン語に観察され，借用語ではないことも明らかであった。

このような等語線は，かつて原スラヴ人が一時的に原イタリック人と密接な言語文化的な接触をしていたことを物語っているようである。また，この事実は生前トゥルバチョフが提唱していた，原スラヴ人の青銅器時代における源郷地をドナウ河中流域に想定するという仮説を裏付けるようでもある。彼の説に間違いがなければ，原スラヴ人がワインの醸造の文化を成熟させたのは，原イタリック人との文化的交流を通じていた年代のことになり，同時にその作業に欠かせない用語をも発達させたのではないかと推論することができる。

（さとう　のりよし，中京大学）

【B04】Тест базового уровня по русскому языку для детей (проведение тестирования в Японии и подготовка к нему)

ШАТОХИНА Ганна

В Японии растет число детей, которые изучают русский язык. Среди них и дети русскоязычных родителей, и дети японских специалистов, работавших в России. Чтобы сохранить русский язык у своего ребенка, некоторые родители сами занимаются со своими детьми. Кто-то из детей посещает групповые занятия в частных русскоязычных школах или занимается с преподавателем индивидуально. И каждый раз встает вопрос: «Насколько хорошо ребенок знает русский язык?»

Тестирование дает возможность получить объективное представление об уровне владения ребёнком русским языком.

Тестирование детей за рубежом, для которых русский язык родной или иностранный, проводится в различных странах мира с 2009 года. Первое тестирование детей по русскому языку в Японии состоялось в августе 2012 года.

Ответственными организаторами тестирования по русскому языку в Японии являются Японская ассоциация культурных связей с зарубежными странами и университет Токай.

Тестирование проводится специалистами Центра языкового тестирования (Санкт-Петербург, Россия).

Виды тестирования детей:

1. Общее владение русским языком как иностранным (в том числе и дети) – ТЭУ, ТБУ, ТРКИ-I, ТРКИ-II, ТРКИ-III, ТРКИ-IV.

2. Тестирование по русскому языку детей 6-10 лет («Оценка коммуникативных навыков»).

3. Тестирование по русскому языку детей 10-18 лет (ТЭУ-Д, ТБУ-Д, ТРКИ-I-Д, ТРКИ-II-Д).

При успешном прохождении тестирования ребенок получает сертификат государственного образца, утвержденный Министерством образования и науки РФ.

В докладе будет освещена процедура прохождения детьми тестирования по русскому языку (ТБУ-Д) в Японии, и даны рекомендации для подготовки к этому виду тестирования.

（シャトヒナ　ガンナ，外務省研修所）

【B05】Творчество в обучении русскому языку японских студентов

ТОМИТА Маргарита

Будущая работа наших студентов-русистов в той или иной степени связана с вербальной креативностью, т.е. со словесным творческим мышлением. Не говоря уже о научных исследованиях в области лингвистики и литературоведения, во всех видах деятельности выпускников-русистов японских вузов, переводческой, преподавательской, дипломатической, нужен творческий подход в работе с русским словом.

Нам, русским преподавателям, носителям языка и культуры, необходимо внести свою лепту в развитие вербальной креативности у японских студентов и для повышения качества их работы, и для самореализации их личности.

Выходя за рамки учебной литературы и формального подсчёта усвоенных лексических единиц, важно через их собственное творчество дать почувствовать своим учащимся красоту и выразительность русского слова, сформировать у них уверенность в том, что они не чужие в мире русской словесности.

В нашем докладе мы рассмотрим такие виды устного и письменного творчества студентов, как «сочинительство» (диалог, рассказ, эссе, стихотворение, сценарий); литературно-лингвистическая викторина (вопросы готовят старшекурсники для младших курсов), конкурс переводов с японского языка на русский и конкурс стихотворных переводов с русского языка на японский (оценивают сами студенты), игра «в переводчика», совместное редактирование текста, летопись курса или группы.

Очевидно, что в наиболее полном объёме такие формы творческой работы можно проводить со студентами продвинутого этапа обучения. Однако и на начальном этапе элементы творчества включать в учебный процесс необходимо и целесообразно, ибо повышение творческой активности заметно ведёт и к повышению эффективности учебного процесса в целом.

Цель нашего доклада – рассмотреть вышеуказанные формы творчества японских учащихся на занятиях по русской словесности с начального этапа обучения до аспирантского, поделиться своим опытом и получить отклики коллег по данной проблематике.

（トミタ　マルガリータ，早稲田大学）

【C01】大戦期のヴァシーリー・ローザノフ－思想的正統性と大衆的愛国のあいだで

野中　進

本報告では，ヴァシーリー・ローザノフの第一次大戦期の評論活動を対象に，彼が〈保守的〉な文筆家としてどうふるまったかを見ていきたい。彼が政治的に一貫性を欠く発言をしばしば行い，ために同時代人の非難を浴びていたことは有名である。だが，戦争という有事にあって彼が選んだポジションは〈保守〉であった。とはいえ保守主義とは明確な教義を有する理論体系ではない。彼が自らの立場をどう組み立て，周囲との差別化を図ったかを見ていくことが重要である。

我々の考えでは，大戦期のローザノフの〈保守〉としての自己規定は二つの要素から成り立っている。一つはスラヴ派の伝統の本流に位置するという自意識である。彼は一方ではストラーホフら「文学的追放者たち」との個人的つながりを（私信や回想を出版することで）強調し，他方ではフロレンスキーら「若きモスクワ・スラヴ派」との連帯を誇示した。そうすることで自分自身をスラヴ派の伝統の正統な継承者として描き出そうとしたのである。その際，ベルジャーエフらによって提示された「スラヴ派の遺産をヴラジーミル・ソロヴィヨフが受け継ぎ，ロシア宗教哲学が開花した」という別の思想的正統性に対する挑戦を行ったとも言える。

ローザノフ的保守のもう一つの側面は，大衆的な愛国ないし大衆的なナショナリズムへの接続である。「1880年以降，普通の男女がナショナリティをどのように感じているかがますます重要な問題になってきた」(ホブズボーム）とされるように，19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてナショナリティやナショナリズム，愛国主義などはより広い社会層に開かれたテーマになっていた。『新時代』紙その他での時事評論家としてローザノフは「一般読者」，とりわけ女性読者を表象することに熱心であった。大戦期には大衆的な愛国をどう表象するかが彼の重要な課題であったことを確認したい。

こうした二つの要素を新聞雑誌のメディア上で統合しつつ，自らの〈保守的〉立場を打ち出すことが大戦期のローザノフの課題であった。だが，そのような自己規定は時代的状況に規定されたものでもあった。彼が本来的・体質的に持つ〈保守的な気質〉―家庭や日常生活への執着に現れたような―と深くつながりつつも，完全に同一のものではなかったのである。したがって 1917 年の革命以後，彼の〈保守〉としての自己規定も大きな揺らぎを示すことになる。

（のなか　すすむ，埼玉大学）

【 C02 】 Мифотворческие поиски русской национальной идеи

ЖДАНОВ Владимир, 鈴木　淳一

Русская национальная идея, несмотря на обилие исследований, продолжает оставаться неясной, таинственной и в высшей степени актуальной темой. Если национальную идею в целом можно определить как внутреннее осознание своей национальной идентичности, то характерное понимание русской национальной идеи обычно выходит за эти рамки. Анализ с позиции мифотворчества позволяет в определённой степени конкретизировать её онтологическую природу, своеобразие которой, на наш взгляд, заключается в тенденции вербально манифестирующее обозначить русскую идею как нечто феноменальное, как движущую духовную силу русского этноса в мировом масштабе, как нечто дорогое, понятное и вместе с тем чудесное для русской личности. И эту тенденцию можно проследить, начиная с 15 в., со знаменитого тезиса старца Филофея «Москва – Третий Рим», и заканчивая декларациями современной национально-патриотической элиты (А. Проханова, А. Дугина). Идеалы славянофилов, «идея всеотзывчивости» Ф.М. Достоевского, теософский мессианизм В.С. Соловьёва, идея “коммюнотарности и братства людей и народов” Н. Бердяева лежат примерно в этой же плоскости.

Такого рода тенденцию в целом можно обозначить как мифотворчество, если исходить из мифологической концепции А.Ф. Лосева. Миф, по А.Ф. Лосеву, это «эйдос вещи», «идея сущего», воспринимаемые личностью с позиции конкретно-исторического момента. Миф, с одной стороны, практичен, насущен, эмоционален, жизненен, а, с другой стороны, есть чудо. Именно эти моменты и являются точками опоры в конструировании русской идеи. Абстрактные контуры русской идеи, её устремлённость не к сущему, а к должному также указывают на ее мифологический характер.

В заключении делается вывод о том, что эту перманентную мифотворческую устремлённость к поискам русской национальной идеи условно можно определить как национальную русскую идею, на которую в 21 веке надвигается опасность глобальной перестройки мира.

（ジダーノフ　ヴラヂーミル，すずき　じゅんいち，札幌大学）

【C03】М.К. Мамардашвили и современная русская мысль

ФИЛАТОВ Владимир

Основные проблемы мировой философии являются, конечно, проблемами и русской философии. В этом смысле не существует никакой специально русской философии. Но существует русский подход к мировым философским проблемам, русский способ их переживания и обсуждения.

Одна из главных особенностей русской философии заключалась и заключается в стремлении мыслителей России органически объединить гносеологию, новую онтологию с вопросами смысла жизни, этическими и эстетическими измерениями бытия и познания.

Именно на таких понятиях как моральный и этический опыт и хотелось бы остановить наше внимание.

Русская философия больше всего занята темой о человеке, о судьбе и путях, о смысле и целях истории. Прежде всего это сказывается в том, насколько всюду доминирует (даже в отвлеченных проблемах) моральная установка: здесь лежит один из самых действенных и творческих истоков русского философствования.

Новый антропологический поворот был выражен, например, в призыве Н. Бердяева написать «антроподицею», оправдание человека. Внимание концентрировалось на мире личности. Поворот к человеку и личности соединялся в русской философии с резкой критикой западных субъективистско-индивидуалистических концепций.

В Советское время одним из главных философов был М.К. Мамардашвили, который также пытался решить проблему человека и личности в русской культуре, создав для этого свой философский метод анализа сознания.

Сквозная тема работ М.К. Мамардашвили – феномен сознания, раскрытие духовных возможностей человека.

Тема, которую можно назвать этикой рефлексии, является основной во всем творчестве М.К. Мамардашвили, которому акт мышления предстает как глубоко этический, вовлекающий личность философа целиком, здесь и теперь. В этом он продолжает традицию русской мысли, которая всегда строила философию на основе высоко-нравственно сознания.

（フィラトフ　ヴラジーミル，早稲田大学）

【C04】ツルゲーネフ作『三つの出会い』における音楽と叙情性

籾内　裕子

ツルゲーネフ作『三つの出会い』には三種類の「歌」が登場する。謎の美女が歌うイタリア語の歌("Vieni, pensando a me segretament...")，その恋人が歌うイタリア語の歌（"Ecco ridente..."），そして恋に破れうちひしがれる美女を見て語り手が思い起こすスペイン語のロマンセ（"Soy un cuadro de tristeza..."）である。これらの歌にはこれまでほとんど注意が払われなかった。特に日本に於いては「艶麗の中にどつか寂しい所のあるのが，ツルゲーネフの詩想である」として桜の咲く晩春のおぼろ月夜を例に挙げた二葉亭の言葉が,『三つの出会い』の味わい方を方向づけたとも言える。しかし，それぞれの歌を歌詞として読むだけでなく，ツルゲーネフが耳にしたであろうメロディーと共に聞くと，この作品が我々の想像以上に鮮やかな叙情性に彩られていることに気づく。

第一の歌については，先行研究でトスカーナ地方の民謡であることが指摘されるにとどまっている。本発表では，発表者が探し出した楽譜に基づいて再現した歌を実際に聴いていただく。この歌は陽気なニ長調のリスペットであり，歌詞は女性の熱い恋心を表現している。ここで女主人公の将来の失恋を先取りし，物憂い歌を連想する必要はない。もっと単純に南国の明るい詩情を味わって良いのである。チェーホフが『無名氏の話』の中で，愛する男の思想に殉じる激しい女に重ね合わせてこの歌を引用していることにも注意を向けたい。

第二の歌は，ロッシーニ作曲のオペラ『セビリアの理髪師』の冒頭で歌われるアルマヴィーヴァ伯爵のカヴァティーナである。アルマヴィーヴァ伯爵は部屋に閉じこもっているロジーナに向かって歌っており，それは『三つの出会い』で美女を訪ねてきて門をたたく男と設定が一致する。しかもこのカヴァティーナはこの先"Vieni bell'idol mio"と続くはずで，それは"Vieni,vieni"と歌った美女に応える歌ともなる。愛し合う男女が互いを呼び合う情景が見事に描きだされているのである。さらにツルゲーネフがヴィアルドー夫人の歌を初めて聴いたときの演目が『セビリアの理髪師』であった事実と重ねあわせれば，この歌の重要性が増してくる。

第三の歌のオリジナルとなるロマンセは追究できなかったが，詠み人知らずの慣用句としていくつものスペイン・カンテ，さらには現代メキシコのポップソングにも歌詞が受け継がれている。第二・三の歌も実際に視聴する。

ツルゲーネフは幅広い音楽教養を駆使し,『三つの出会い』の叙情性を際立たせる歌を織り込んだのである。

（もみうち　ゆうこ，早稲田大学）

【C05】ロシア音楽研究の新しいパースペクティヴ

一柳　富美子

我が国ではソ連崩壊直後から,「新たな視点に立つ」という触れ込みのロシア音楽関連著書・論文が量産されてきた。しかし，政治・経済体制が大転換しても，社会や文化の全てが直ちに変わるわけではなく，人文科学分野の研究成果に体制の変化が反映されるまでには相当な時間が掛かることは，ロシアに関わっている研究者なら容易に想像できることだ。音楽学においても同様で，2010 年頃までに日本で紹介された情報の大半は，実際には旧ソ連時代のいわば「大本営発表」の焼き直しでしかない。現在広く読まれているロシア音楽事典やロシア音楽史はその典型である。

本発表は，上記のように錯綜した情報を整理し，近年ロシアで漸く出始めた真の最新研究成果を紹介すると共に,過去 30 年の内外のロシア音楽研究を総括して今後の展望を示すものである。

発表内容は次の 5 つの柱を持つ。1.欧米に於けるロシア音楽研究の総括。2.日本国内で出版された主要文献の評価。3.海外移住したロシア人研究者の業績。4.1980 年代以降のソ連音楽学の特徴と問題点。5.ロシア国内の最新研究動向。

4.に関しては，ソ連時代末期の 1984 年に刊行開始されて 2004 年に完結した 5000 ページを超える全 11 巻の『ロシア音楽史』を取り上げる。このシリーズはソ連音楽学の水準を知る最重要文献であるにも拘わらず，ロシア語が障害となっているためか，日本国内では殆ど言及されていないので，この機会に詳解したい。5.に於いては，2010 年にロシアで出版されて 2011 年ダラム大学でのロシア音楽国際会議でも大変な話題となった"1948 год в советской музыке"と，注目の Россия XX век シリーズの一環として本年出版された"Музыка вместо сумбура композиторы и музыканты в стране советов 1917-1991"を中心に，ソ連時代の音楽文化政策の実態に迫る。

（ひとつやなぎ　ふみこ，東京藝術大学）

【C06】動く都市／静止する都市—アレクサンドル・メドヴェトキンの『新モスクワ』

本田　晃子

1920 年代末から映画監督としての活動を開始したアレクサンドル・メドヴェトキンは，風刺やグロテスクなどの手法を用いた作風で知られている。今回の報告では，その彼のフィルモグラフィーの中でも際立って異色な作品である，『新モスクワ』(1938 年）を取り上げる。『幸福』(1934 年）や『奇跡の娘』(1936 年）など，それまでのロシアの農村を舞台とした作品から一転，メドヴェトキンが突如都市を舞台に撮影した長編映画が,『新モスクワ』だった。そして彼が自らの作品の主題に選んだのが，1935 年に採択されたスターリンのモスクワ再開発計画，通称ゲンプランに他ならなかった。地下鉄などの新たな公共交通機関を用いた主人公たちのめまぐるしい移動や，文字通り運動する建築（街路の拡張のため，同時期のモスクワでは実際に建築物の移動が行われていた）を通して，メドヴェトキンはダイナミックに活動し変化しつつある首都の姿を描き出した。

対して物語のクライマックスで示されるのが，これらの運動の終着点，ゲンプランが完遂されたのちの，新首都の静止した威容である。この未来のモスクワの姿は，建築技師である主人公アリョーシャが制作したモスクワのミニチュアを用いて撮影されるのだが，一見ゲンプランの称揚であるかのように映るこのシーンによって，メドヴェトキンの『新モスクワ』は上映中止に追い込まれてしまう。

クライマックスにおいて近未来の（既に建設された）理想世界を提示するというプロットは，周知のように決して『新モスクワ』に限られたものではなかった。エイゼンシテインの『全線—古きものと新しきもの』(1929 年）では，主人公は自身の夢を通じて未来のコルホーズへと移動し，アレクサンドロフの『輝ける道』(1941 年）では，主人公は空飛ぶ車に乗って未来のモスクワへと到着する。これらの未来の描写，とりわけアレクサンドロフの“許容された”モスクワと，メドヴェトキンの未来のモスクワの相違は，一体どこにあったのだろうか。本報告では，Emma Widdis の指摘する映画内における新旧モスクワ・イメージの衝突や断絶に着目しつつも,『新モスクワ』を新たに「映画についての映画」という観点から読み解くことを試み，ゲンプランによって描かれたモスクワまでをも一種の虚構空間として示しかねない危険性を秘めていた，メドヴェトキンのモスクワ・イメージを明らかにしていく。

（ほんだ　あきこ，北海道大学）

【C07】イヴァン・プイリエフ『クバン・コサック』における戦後コルホーズの形象

田中　まさき

ソヴィエト時代の映画監督イヴァン・プイリエフ（1901-1968 年）は，日本では後年のドストエフスキーの映画化によって知られているが，スターリン時代に製作された娯楽作品によっても当時非常な人気を博した。プイリエフのミュージカル・コメディーは，農業集団化を前提とした「新しいソヴィエトの」農民を主人公とするもので，都市（モスクワ）の洗練された文化が農村より優位に立つとは限らない世界観によっているという特色を持つ。

大祖国戦争の後，プイリエフ初のカラー作品『シベリヤ物語』(1947 年，モスフィルム）に続いて製作された『クバン・コサック』(1949 年，モスフィルム）は，戦前の作品群の流れを汲むような，農村地帯を舞台に人々の恋愛模様が描かれるミュージカル･コメディーである。なお混乱のおさまらない戦後の社会において，疲弊したソ連農村の厳しい現実にも関わらず，そこからかけ離れて，豊かで楽しい生活を明るく描き出したこの作品は大成功を収め，プイリエフの傑作というだけでなく，ソ連ミュージカル・コメディーを代表する一本となった。

本報告では，プイリエフの代表作の一つでありながら，これまで本格的な研究の対象となっていなかった『クバン・コサック』を中心に，他の作品との比較を通じて，プイリエフ作品の特徴を明らかにし，その到達点を確認する。比較の対象としては，プイリエフ自身の戦前の作品のほか，ボリス・バルネット（1902-1965 年）の『豊作の夏 Щедрое лето』(1951 年，キエフ映画スタジオ）を取り上げる。この作品は『クバン・コサック』同様に，戦後の後期スターリン時代に製作された，コルホーズを舞台とする娯楽映画である。また，この映画の共同脚本家として名前の挙がっているエヴゲーニイ・ポメシコフ（1908-1979 年）は，プイリエフにとって最初の農村ミュージカル・コメディーとなった『富裕な花嫁』(1937 年，ウクラインフィルム）とそれに続く『トラクター仲間』(1939 年，モスフィルム，キエフ映画スタジオ)，さらには戦後の『シベリヤ物語』の脚本を手がけている。比較を通じて,『クバン・コサック』が同時代の現実から乖離した理想を描写しながらも，観客に支持され，成功を収めたのは何故かについて考えてみたい。

（たなか　まさき，東京大学）

【C08】メイエルホリドの演出における音楽性―『ブブス先生』(1925 年)を通して―

夏目　智徳

フセヴォロド・メイエルホリドは実にうまく音楽をあやつった人物であった。次のような言葉が残されている。

> 音楽とは何か？それは五線の中に天才の手によって加えられた，多数のメモなのである。そのもっともありふれた五本の線の中では，多くの想像と感情を動きの中に入れ込むことが出来るのである[1]。

こうしたメイエルホリド自身の言葉が存在するにもかかわらず，日本におけるメイエルホリド研究では，メイエルホリドの音楽性に関してはほとんど触れられていないのが現状である。近年,『メイエルホリド　演劇の革命』という文献[2]において音楽に関する記述が多く取り扱われるようになり，また一橋大学の伊藤愉氏が「メイエルホリドの演劇空間における音楽的構成と俳優の演技―一九二六年『検察官』の演出」という論文[3]を執筆されるなど，メイエルホリドと音楽に関する問題に，だんだんと目が向けられ始めているように思う。

今回,私は *The Meyerhold Theatre,1920-1938* というマイクロ資料をもとに，メイエルホリドの演出における音楽性を探ることにした。特に興味深く取り組んだのが,『ブブス先生』における音楽性である。この作品は音楽的要因から失敗作だと言われ続けてきたが，実際に行われた音楽的趣向は音楽だけにとどまらず，俳優の身体とも密接に関わっていたのである。こうした事実を踏まえ,『ブブス先生』を通して見えてきたメイエルホリドの演出における音楽性を今回発表させていただきたいと思う。

（なつめ　ちさと，明治大学修士修了）

[1] Aleksandr Gladkov, Alma Law (trans&ed.), *Meyerhold speaks, Meyerhold reheases*, London-New York, 1997, p.165.

[2] エドワード・ブローン著，浦雅春・伊藤愉訳,『メイエルホリド　演劇の革命』，水声社，2008 年

[3] 伊藤愉著,「メイエルホリドの演劇空間における音楽的構成と俳優の演技―一九二六年『検察官』の演出」,『西洋比較研究(10)』，日本演劇学分科会西洋比較研究会，2011 年，pp.103-118.

【C09】日露相扶会と内藤民治の活動

内田　健介

1925 年 1 月の日ソ国交回復前後，日本とソヴィエトのあいだで活動した日露相扶会という一つの民間団体が存在した。しかし，同時期に活動していた後藤新平が代表を務める日露協会や秋田雨雀が代表を務める日露芸術協会に比べ，日露相扶会の活動はこれまであまりかえりみられてこなかった。

1927 年の新ロシア美術展，1928 年の二世市川左団次訪ソ公演など国交回復以降に日ソ交流が盛んになったが，国交回復直後にもっとも早くソヴィエトのポスター展覧会を開催したのは日露相扶会であり，民謡歌手のヤムンゼンのコンサートを開催するなど日ソ間の文化交流に貢献していた。そして，日ソ国交回復以降，日本とソヴィエトのあいだで人々の行きかいが始まると，文化面だけでなく大使館の創設と駐日大使の来日，林業や漁業などの貿易，文化面での交流が始まるが，ここでも日露相扶会はソヴィエトより来日した人々の歓迎会を開催し，日本の有力者とソヴィエト政府の親交のために働いている。

しかしながら，日露相扶会は会報のような活動報告を残しておらず（会そのものが作成していない可能性が高いが)，正式な会員名簿も残されていないため，組織の詳細だけでなくその成立と解散時期など不明な点が多い。そこで本発表では新聞報道や国立公文書館，外務省外交史料館に残されている資料などを用いて，日露相扶会の活動を明らかにしていきたい。

また，国交回復前にも日露相扶会は日ソ間で活動を開始していたが,国交回復前年の 1924 年に代表内藤民治がソヴィエトに渡り，スターリンやトロツキー，ルナチャルスキーといったソヴィエトの中心人物たちと会談を行っている。日本の政治家でも有力者でもない内藤が，なぜこのような人物たちと会談することが可能だったのか。また，国交回復に日露相扶会はどのように関わっていたのか，これらの疑問への答えを内藤民治の過去や人間関係などを明らかにしつつ導き出していきたい。

（うちだ　けんすけ，早稲田大学）

【C10】大庭柯公と雑誌『露西亜評論』—1917 年以後の日本におけるロシア研究のゆくえ—

松枝　佳奈

雑誌『露西亜評論』は，1918（大正 7）年から 1920（大正 9）年頃まで東京の進文館より発行された月刊ロシア研究雑誌である（現在，25 冊の所蔵判明）。ロシアの政治や経済，外交，軍事，社会問題，文学，芸術，宗教，思想まで多岐にわたる論文・記事が掲載された。寄稿者は八杉貞利（1876-1966），昇曙夢（1878-1958），瀬沼恪三郎（1868-1953）らロシア事情に精通した早稲田大学や東京外国語学校，正教神学校の教授やジャーナリスト，商社員，文学者など多彩である。本誌は一次資料として扱われたことはあるが，それ自体は直接の研究対象とされてこなかった。

しかし寄稿者の一人であったジャーナリスト・ロシア研究者の大庭柯公（1872-1922 頃）にとって，同誌は理想的なロシア研究を体現した雑誌だったのではないか。本発表は『露西亜評論』を通読し論文・記事テクストを分析した上で，同誌における大庭のロシア研究の実態を解明するものである。さらに派生組織「露西亜研究会」の活動も初めて考察し，1917（大正 6）年以後の日本の総合的なロシア研究とそれに大きく関わる大庭の活動を支えた，最初で最後の重要な媒体として本誌の意義を再検討する。

大庭は，第二次ロシア革命を経た新しいロシアの国民性や民族性の把握のため，学術的で総体的なロシア研究の必要性を説いていた。彼自身は編集責任者ではなかったが，執筆記事や講演録が巻頭を飾り，そのロシア研究論や情報収集網が活用されたと思われる記事が存在する。実際 1918 年以降,他新聞雑誌の大庭のロシア関係の記事数は減少しており，彼が本誌編集の中心的な役割を果たしていたと考えられる。また同誌ではロシアの政治・社会状況や革命の展望が多く論じられた。国家変革や社会主義思想を擁護する立場から革命を積極的に評価する論や，革命後の混乱した状況を挙げてロシアの将来を悲観する論があり，大庭やロシアに関わった日本の知識人たちの革命に対する認識の共通点や差異が把握できよう。『露西亜評論』は 1917 年以後，各分野の専門家が所属や思想を越え，地域研究としてロシア研究を実践するため大同団結し，その成果をより社会に開かれた形で発信した場であった。そして大庭を軸に同誌を分析することで，個別の人物研究では把握できない，大正期ロシア研究の同時代的展開や広範な人物関係が明らかにされるはずである。

（まつえだ　かな，東京大学院生）

【C11】東京裁判　判事・検察・弁護団の攻

有泉　和子

極東国際軍事裁判，所謂東京裁判に対する一般日本人のイメージは悪い。東条英機等 A 級戦犯を裁き処刑したものという漠然とした知識しか持っていないのが普通である。理由は高校までの教育で扱われることが少なく，大学では法学部の国際法学者，政治学者が扱うため学生の一部しか学ばないこと，日本人一般は先の戦争に関わりたがらず，東アジア諸国との軋轢もあるため等であろう。

東京裁判は第二次世界大戦後，連合国が日本の政治・軍事指導者の戦争責任を訴追するために開かれた国際軍事裁判である。ナチス・ドイツの戦争指導者たちに対する国際軍事裁判，所謂ニュルンベルグ裁判と対応し東京・市ヶ谷で開かれた。戦犯容疑者の逮捕が行われたのが 1945 年 9 月,公判は 46 年 5 月 3 日から 48 年 11 月 12 日まで 2 年半にわたり，結果は絞首刑 7 名，終身禁固 16 名，禁固 20 年，禁固 7 年が 1 名ずつ（内 4 名が獄死），公判中死亡が 2 名，発狂により免訴が 1 名であった。

この東京裁判で特異の位置を占めたのが原爆投下後に参戦し，わずか一週間しか日本と戦争をしていないソ連の検察団・判事であった。冒頭陳述で参与検察官ゴルンスキーは訴因を日露戦争から始め，張鼓峰事件，ノモンハン事件と進めた。ソ連の歴史観の現れが見て取れる。

これに対しソ連側の日ソ中立条約違反を指摘しその非を唱えたのが，終戦まで日本の敵国であった米国の弁護人ブレイクニー少佐をはじめとする弁護団であり，それを証明する宣誓口供書は同様に米軍人ディーン少将のものであった。法廷はこれを受け取っている。ここには，既に法廷外では始まった冷戦構造の一端が現われている。

今日でも評価の分かれるこの東京裁判を素材に，ソ連の対日歴史観を明らかにすることを最終目的として，数度に分けて報告する。今回は第一回目として，連合国側の判事・検事・弁護団がソ連の訴因により分裂する部分を中心とする。

同裁判には厖大な記録がある。国立国会図書館憲政資料室に所蔵される『極東国際裁判速記録』や記録映像である。一方弁護側が提出した書類の三分の二が却下されている。報告にはそれらも使う。

78 年の発売と同時に初版で 10 万部を越す大ベストセラーとなったという，当時のソ連側検察団次席検事スミルノフ，ザイツェフ著『東京裁判』(川上洸，直野敦訳)，KGB 元大佐キリチェンコ著「東京裁判への秘密指令」(川村秀訳）にも言及する。

（ありいずみ　かずこ，東京大学）

【C12】ロシア探偵小説と日本におけるその紹介と批評

坂中　紀夫

探偵小説とは一般に，不可解な現象の提示と，探偵によるその論理的な解明を要件とする文学ジャンルである。ここで言う不可解な現象とは，しばしば犯罪に関わるものであり，従って探偵小説がジャンルとして成立するには，探偵の恣意的な捜査や推論を禁止し，何が正当であるかを定める社会制度が整っている必要がある。その最たるものが公正な司法制度や捜査機構であるが，この意味で探偵小説は「民主的な慣習の産物」なのだと言える（ハワード・ヘイクラフト)。また，生死を「娯楽」として扱うこの文学ジャンルは戦間期に黄金時代を迎えるが，その背景には第一次大戦における「大量死」の経験が指摘されている（笠井潔)。探偵小説とはつまり，社会と個人との実存的な関係を，論理的推理という形式的な操作において扱うことを一つの特徴としたジャンルなのである。

以上のような特徴はしかし，19 世紀末以降から大衆的に消費され始める黎明期のロシア探偵小説にはあまり当てはまらない。先行研究が示すように，この時期の作品は論理的推理を展開するというよりは，冒険小説的な内容からなり，この傾向は 20 世紀前半においてもスパイ小説などに場を移して受け継がれていく。このことは，黄金時代を迎える同時期の欧米探偵小説が,「ノックスの十戒」やヴァン・ダインの「推理小説作法の二十則」などに象徴される形式化の流れの中で，事件の解決にとっての論理性やフェア・プレイのさらなる重視に向ったことを考えると，検討に値する問題である。

この問題は，日本におけるいわゆる本格・変格論争や，社会派に対する新本格の関係と緩やかに類比させて考えてみることが出来るだろう。では，こうした経緯を踏まえ，欧米の作品にも通じた日本の探偵小説関係者は，部分的に紹介されたロシア・ソビエトの探偵小説をどのように評してきたのか。現代の専門家の厳密な研究の他にも，これまで日本の探偵小説家や翻訳家などがロシア探偵小説に言及している例は散見される。当発表は，ロシア探偵小説の歴史の概略的な整理を試みるとともに，それに対するこれまでの日本の探偵小説関係者の捉え方をまとめたい。大量生産される大衆文学としての探偵小説はその全体像を掴むことが困難であるが，彼らの眼識はその特徴についての何らかの示唆を与える貴重な資料である。

（さかなか　のりお，同志社大学）

ワークショップ

【W01】〈コロキウム—報告と討論〉全国 6 言語アンケート調査結果（中間報告）とロシア語学習者の傾向

本企画は，2012年度に行ったドイツ語，フランス語，スペイン語，ロシア語，中国語，韓国･朝鮮語の学習者（2万人を超える学生の回答）及び担当教員に対する大規模アンケート調査の概要とその結果の中間報告を行い，特にロシア語の結果を中心に他言語との比較等も試みながら，ロシア語教育の現状と今後の課題，方向性について討論することを目的とする。

このアンケート調査は，2つの科研事業「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究」（研究代表：西山教行，基盤研究（A)),「大学間，高等学校－大学間ロシア語教育ネットワークの確立」（研究代表：林田理惠，基盤研究（B)）の一環として，学習者の動機づけと学習環境との関係を明らかにし，シラバス，教材を含めた教育･学習環境を改善することを目的として実施された。

調査は，第1回目を2012年5月から6月にかけて，第2回目を12月から1月にかけて，同じ質問紙を用いて，同じ学生,教員を対象にして実施した。アンケートの回答者は，外国語を教養科目として選択している学生（主な対象は1･2年生）とその授業の担当教員で，第1回調査の回答者数等は以下の表の通りである．調査対象の言語は，日本の大学で教養科目として選択できる可能性が高い6言語である。

	回答学生数	回答教員数	クラス数	大学数
ドイツ語	2711	75	143	35
フランス語	3024	79	171	39
スペイン語	3480	55	146	27
ロシア語	1114	55	97	30
中国語	4956	119	230	45
韓国･朝鮮語	1778	39	68	26
合計	17063	422	855	202

アンケートは5件法による質問1～質問5の5種類，73項目からなるが，今回は中間報告として，動機づけ理論である自己決定理論に基づいて設定された質問1，期待･価値理論に基づく質問2，さらに，大学で英語以外の言語を学ぶ必要性･学習理由を問うた自由記述設問の質問3の分析結果を紹介する。

質問1では，項目を自己決定度（動機づけ）の高い順に：1．内発的動機づけ，外発的動機づけ（2．同一視的調整　3．取り入れ的調整　4．外的調整)，5．非動機づけ，の5段階に階層づけて因子分類し，学習者の動機づけ

の程度を統計分析によって計測した。質問2では，同じく項目を期待･価値理論に基づいて，遂行課題に対する「期待」（成功可能性に関する主観的認識）と4つの「価値」（importance, interest, utility, cost）の動機づけ変数に分類，統計処理をし，動機づけの質について量的分析を行っている。さらに，質問3の英語以外の言語を学ぶ必要性･学習理由に対する自由記述回答の質的分析を実施，それらと動機づけとの相関関係の抽出を試みた。

今回の報告では，上記の作業によって得られた全国のロシア語学習者の全体的傾向，1，2年次別の比較，第1回目と2回目の継時的変化等の結果を紹介し，すでに同様の分析過程によって出ている他言語の結果との比較分析も行いたい。さらには，調査対象に含まれる高等学校，高等専門学校の学習者特性についても明らかにしていく。

アンケート調査は全国30機関，55名のロシア語教員の協力によって実現したもので，全体分析結果について，本コロキウムを，これら調査に協力いただいた教員の方々に対する報告の場とし，また，抽出データ･分析結果に基づいて，ロシア語教育の現状と課題，今後の方向性について議論を深めることができればと考える（それぞれの機関別データ結果については各教員に送付ずみ）。

【分析･研究グループ】
角谷　明美（富山県立志貴野高等学校）
金子百合子（岩手大学）
熊野谷葉子（慶應義塾大学）
黒岩　幸子（岩手県立大学）
堤　　正典（神奈川大学）
林田　理惠（大阪大学）
ボンダレンコ・オクサーナ（富山県立伏木高等学校）
三浦由香利（神戸大学）
宮崎　衣澄（富山高等専門学校）
柳町　裕子（新潟県立大学）
山本　有希（富山高等専門学校）
横井　幸子（大阪大学）

【報告者】
金子百合子（岩手大学）
林田　理惠（大阪大学）
ボンダレンコ・オクサーナ（富山県立伏木高等学校）
柳町　裕子（新潟県立大学）
以上，五十音順

責任者：大阪大学大学院言語文化研究科　林田理惠

【W02】ワークショップ—2015 年 ICCEES 幕張大会参加に向けて

2015 年 8 月 3-8 日に ICCEES（中欧・東欧研究国際協議会 International Council for Central and East European Studies）の第 9 回世界大会が千葉県幕張市で開かれます。ICCEES は（旧）ソ連・東欧研究者の世界組織として 1974 年に創設され，5 年に一度ヨーロッパ・北米の諸都市で世界大会が開かれてきました。今回，初めてアジアで世界大会が催されます。世界大会の準備・実施は JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会 Japanese Council of Russian and East European Studies）に承認された組織委員会が担当していますが，日本ロシア文学も JCREES の構成学会として大会の準備・組織への人的・資金的貢献を検討しています。

しかし，世界大会の成功のためにもっとも価値ある貢献とは学術的な貢献，つまり大会に実際に参加し，世界の研究者と学術交流を行うことでありましょう。日本ロシア文学会の構成員は文学・言語学・文化研究などの分野で積極的に参加し，議論をリードすることが期待されています。

このパネルは，ロシア文学会の会員が ICCEES 世界大会への参加について具体的なイメージをもち，有益な情報を交換しあう場所として企画されました。これまで ICCEES の活動にいろいろな形で関わりを持ってきた学会員が，この大会の特徴や雰囲気，研究上の意義や成果などについて，各自の経験を踏まえた報告を行います。すでに幕張大会に向けた企画を持っている会員の構想発表も組み込みながら，パネルを組むためのノウハウ，資金面も含めた準備，参加登録から始まる手続きの段取りなど，具体的な事項にもふれる予定です。そうした報告をベースに意見交換することで，会員諸氏のアイデアの刺激とその実現に資することが我々の狙いです。

【プログラム】（発言各 10 分，全体討論 20 分）

司会：望月哲男

(1) 幕張大会の準備状況と 2015 年へのスケジュール（乗松亨平）
(2) ICCEES 大会での報告と討論の経験から（木村崇）
(3) 外国人研究者とパネルを組む上での具体的な問題（野中進）
(4) 具体的なパネル案（生田美智子，鴻野わか菜，越野剛）
(5) 全体討論（質疑や提案，情報提供など）

【参加者・所属】（五十音順）
生田美智子（大阪大学），木村崇（京都大学），鴻野わか

菜（千葉大学），越野剛（北海道大学），野中進（埼玉大学），乗松亨平（東京大学），望月哲男（北海道大学）

以上の研究報告要旨は著者に無断で引用できない。
Not for quotation without the author's agreement.